

上生野遺跡

—上生野地区農村基盤総合整備事業に伴う緊急発掘調査報告書—

1995. 3

明科町教育委員会

(明科町の埋蔵文化財第5集)

KAMIIKUNO

上生野遺跡

—生野地区農村基盤総合整備事業に伴う緊急発掘調査報告書—

1995. 3

明科町教育委員会



上生野遺跡全景



北地区全景



2号住居址遺物出土状況



2号住居址出土土器

序

上生野遺跡のある明科町大字東川手上生野地区は犀川右岸の河岸段丘にある戸数50戸ほどの小集落で、古代、中世と文献に登場することもなかったこともあり、古代の遺跡の存在は明らかではありませんでした。昭和53年からの町史編纂の調査で平安時代の土器の出土が明らかになりようやく古代の遺跡として認識されるに至りました。

平成5年度より、この上生野地区で圃場整備と下水道整備を中心とした農村基盤総合整備事業が行われることとなり、それに先立ち、平成5年12月から翌6年1月まで、埋蔵文化財の発掘調査を行いました。

調査の結果、当初の予想もしなかった古墳時代前期である4世紀前半の住居跡2軒、平安時代住居跡4軒、中世の溝跡などが確認されました。中でも古墳時代初頭の住居は明科町では初めてであるばかりでなく、松本平でも例が少なく、特にこの住居から発見された土師器は弥生時代から古墳時代への土器の変遷を知る上で貴重な資料となりました。

この発掘調査にあたり、冬期間の困難な調査にもかかわらず、調査の担当をお引受けいただきました山田瑞穂先生をはじめとした調査員の先生方、調査にご理解とご協力をいただきました地元実施委員会の方々など関係各位に深甚なる敬意と感謝を申し上げる次第であります。

平成7年3月

明科町教育委員会

教育長 平林 隆道

例　　言

1. 本書は、団体営農村基盤総合整備事業（生野地区）に伴い、事業主体者である明科町と明科町教育委員会との事務委任協定に基づいて実施した、明科町大字東川手上生野地区所在の上生野遺跡の発掘調査報告書である。

2. 現場での発掘調査は平成5年12月から1月にかけて行い、経費については事業主体である町が負担し、農家負担分については国庫及び県費補助金を受けた。

3. 調査は明科町教育委員会が主体となり調査団を組織し調査を実施した。

4. 本書作成における作業分担は次のとおりである。

・遺構　測　量	大沢哲、降幡健一、藤原誠子、小林のり子、宮沢幸子、唐沢政子、小林佐恵子 矢花広子、細尾みよ子、望月弘満
ト レース	大沢、小林敬治、小林佐、唐沢、細尾
写　真	大沢、降幡
・遺物　洗浄、注記、復元	藤原、小林の、宮沢、唐沢、小林さ、矢花、望月、細尾
実　測	大沢、小林の、宮沢、唐沢、小林さ、矢花、細尾、
写　真	大沢、小林敬
・編集	大沢

5. 本書の執筆は大沢が主として行ったが、第2章第1節「位置と地理的環境」については関全寿先生の、古墳時代の土器については松本市教育委員会の直井雅尚氏の玉藻を賜った。記して謝意を表したい。

6. 北地区の住居址および南地区の中世の遺構で出土した炭化材について、樹種の同定と放射性炭素(¹⁴C)による年代測定をパリノ・サーベイ(株)に依頼し、報告を第3章第3節に掲載した。

7. 土器の実測図で、断面を黒く塗りつぶしたものは須恵器と灰釉陶器である。

8. 実測図中のスクリーントーンは以下のことを表現している。

遺構		焼土		炭化物、灰
遺物		黒色処理		赤彩

9. 本調査の出土品、諸記録は明科町教育委員会が一括保管している。

目 次

口絵

序

例 言

目 次

第1章 調査状況

第1節 調査の経過	1
第2節 調査組織	3
第3節 調査日誌	4

第2章 遺跡の環境

第1節 位置と地理的環境	7
第2節 歴史的環境	10

第3章 遺構と遺物

第1節 調査の概要	15
第2節 遺構と遺物	
(1) 繩文時代の遺構と遺物	22
(2) 古墳時代の遺構と遺物	25
(3) 平安時代の遺構と遺物	33
(4) 中世以降の遺構と遺物	43
第3節 自然科学分析	48

第4章 まとめ

写真図版	写1～11
------------	-------

第1章 調査状況

第1節 調査の経過

平成5年度より東川手上生野地区全域では場整備事業と下水道整備を中心とした農村基盤総合整備事業が町を事業主体として行われることとなり、町教育委員会へ埋蔵文化財の所在地であるか否かの照会が平成4年8月にあった。同地区は昭和59年刊行の『明科町史 上巻』には昭和30年ころ県道拡幅工事の際に灰釉陶器の碗が出土したこと、「西堀」「クネノ内」「中村」「みとふじ」などの地名が残っており、中世の小土豪の屋敷の存在が推定されることが記されており埋蔵文化財の所在が確実視されることから、平成4年10月28日、事業主体である町は場整備室、県教委文化課、町教委社会教育課が現地協議を行い、平成5年10月以降試掘を兼ねて灰釉出土地、推定期間、御堂跡の3地点を中心に発掘調査を実施することとした。また、整理作業及び報告書の刊行は平成6年度に行うこととした。

平成5年は異常気象で収穫が遅れ11月まで農作業が続いたため調査の開始が遅れ、調査は12月7日から地区内に13のトレンチを設定し、バックホーによる試掘調査を行った。その結果、「みどうじ」と地元で呼ぶ地点から土師器や須恵器片が出土し、焼土やピットなどが見られた。「中村」からは中世の溝が検出された。他の地点からは若干の遺物の出土はあったものの遺構の存在は確認できなかつたため、調査を「みどうじ」「中村」の2か所に絞り、トレンチを拡張し調査を行った。冬期間の調査で、土壤が粘土であることなどから時間のかかる調査となり、正月を挟んで1月28日まで調査を行った。

整理作業については、遺物の洗浄及び接合作業の一部については平成5年度に行い、残りの整理作業、報告書作成は平成6年度において実施した。

事業費は平成5年度4,400千円(事業者負担分3,640千円、文化財保護側負担分760千円)、平成6年度は1,250千円(事業者負担分1,063千円、文化財保護側負担分187千円)であった。

以下事務手続について記すこととする。

平成5年度

- 平成5年 5月10日 国庫補助金内定通知(4月26日付府保伝第7号)
 - 5月21日 国庫補助金交付申請書提出
 - 5月20日 県費補助金内定通知(5教文第2号)
 - 6月4日 県費補助金交付申請書提出
 - 9月27日 国庫補助金交付決定通知(8月11日付委保第71号)
 - 9月27日 県費補助金交付決定通知(県教育長指令5教文第2-33号)
 - 10月18日 明科町より発掘調査の事務委任依頼(5明産圃第47号)
 - 10月25日 明科町と発掘調査の事務委任協定書締結
 - 12月7日 発掘調査開始
- 平成6年 1月28日 発掘調査終了
- 3月23日 明科町に発掘調査決算報告書提出
 - 3月29日 国庫補助金実績報告書提出
 - 3月29日 県費補助金実績報告書提出

3月31日 国庫補助金確定通知（5教文第1-37号）

3月31日 県費補助金確定通知（5教文第1-37号）

平成6年度

平成6年 6月24日 国庫補助金内定通知（6月24日付庁保伝第7号）

7月18日 国庫補助金交付申請書提出

6月24日 県費補助金内定通知（6教文第2号）

7月28日 県費補助金交付申請書提出

9月26日 国庫補助金交付決定通知（8月23日付委保第71号）

9月26日 県費補助金交付決定通知（県教育長指令6教文第2-16号）

10月18日 明科町より発掘調査の事務委任依頼（6明座圖第一号）

10月25日 明科町と発掘調査の事務委任協定書締結

平成7年 3月25日 明科町に発掘調査決算報告書提出

3月29日 国庫補助金実績報告書提出

3月29日 県費補助金実績報告書提出

第2節、調査体制

平成5年度

調査団長 平林 隆道（明科町教育委員会教育長）
調査主任 山田 瑞穂（日本考古学協会員）
調査員 大沢 哲（町産業課は揚整備係長、平成6年1月より社会教育課兼務）
宮川 清治（県文化財保護協会理事、明科町文化財調査委員）
特別調査員 関 全寿
調査作業員 唐沢政子、小林佐恵子、小林のり子、藤原誠子、細尾みよ子、宮沢幸子、矢花広子、望月弘満、赤堀哲夫、高橋ひめ子、小松郁郎、山崎照友、浅野弥生、望月今代、宮川琢郎、堀内国夫、和田一雄、内川康子、等々力貞治、竹内たき子
事務局（町教委社会教育課）
課長 石田 寿成、社会教育係長 藤原 高廣、社会教育係 降幡 健一、古沢 幸恵

平成6年度

調査団長 平林 隆道（明科町教育委員会教育長）
調査主任 山田 瑞穂（日本考古学協会員）
調査員 大沢 哲（社会教育課社会教育係長）
宮川 清治（県文化財保護協会理事、明科町文化財調査委員）
特別調査員 関 全寿
調査作業員 唐沢政子、小林佐恵子、小林のり子、藤原誠子、細尾みよ子、宮沢幸子、矢花広子、望月弘満
事務局（町教委社会教育課）
課長 増沢 森義、社会教育係長 大沢 哲、社会教育係 小林 敬治、古沢 幸恵

第3節 調査日誌

平成5年度

平成5年12月7日(火)晴 本日より試掘開始、作業員7名。1トレンチ及び2トレンチを重機で掘削。1トレンチで土師器などが出土。柱穴、竪穴住居址も検出。

12月8日(水)晴 1トレンチの竪穴住居址を中心に付近の表土削平。柱穴群検出。3トレンチ掘削

12月9日(木)晴 4~6トレンチ掘削。1号住居址発掘開始。基壇状遺構精査。

12月10日(金)曇りのち小雨 1号住居址掘り下げ、柱穴群遺構検出作業、2棟の建物址検出基壇状遺構精査実測開始。7~11トレンチ掘削、8トレンチで溝検出。

12月11日(土)休み

12月12日(日)休日

12月13日(月)休日

12月14日(火)雨のため休み

12月15日(水)曇り 本日より本調査開始、作業員19名。1号住居址掘り下げ、建物址柱穴検出作業、基壇状遺構実測。12~14トレンチ掘削。

12月16日(木)晴 1号住居址掘り下げ、建物址柱穴検出作業、基壇状遺構実測。9、10トレンチを延長し遺構の広がりを調査し、8トレンチを西側に拡張開始。10トレンチで溝の断面を開き調査員にみてもらう。

12月17日(金)晴 1号住居址掘り下げ、建物址柱穴検出作業、基壇状遺構実測。南地区表土削除、遺構検出作業開始。

12月18日(土)晴 1号住居址掘り下げ、建物址柱穴検出作業及び掘り下げ、基壇状遺構実測。南地区表土削除、遺構検出作業。

12月19日(日)休日

12月20日(月)休日

12月21日(火)曇り 1号住居址精査、建物址柱穴掘り下げ、基壇状遺構実測。南地区表土削除、遺構検出作業、焼土、石列遺構検出。

12月22日(水)曇り 1号住居址完掘、柱穴群掘り下げ、基壇状遺構実測。南地区遺構検出作業。

12月23日(木)休日

12月24日(金)晴 北地区掘り上がり写真撮影、遺構実測開始。南地区遺構検出作業。

12月25日(土)晴 北地区遺構実測。南地区焼土、石列遺構地点を押さえただけで掘り下げることとする。

12月26日(日)晴 北地区遺構実測。南地区溝の検出作業。本日で年内の作業終了。

12月27日(月)休日

12月28日(火)休日

12月29日(水)~平成6年1月3日(月)年末年始休業

平成6年 1月4日(火)休日

1月5日(水)晴 北地区をさらに西側へ拡張のため重機によりトレンチをあけ、遺構が検出された

ため表土削除。

1月6日(木)休日

1月7日(金)休日

1月8日(土)休日

1月9日(日)休日

1月10日(月)晴 北地区遺構検出作業、2、3、4号住居址確認。南地区溝掘り下げ。

1月11日(火)晴 北地区遺構検出作業、南地区溝掘り下げ。

1月12日(水)晴 北地区2～4号住居址掘り下げ。南地区溝掘り下げ完了、写真撮影。

1月13日(木)晴 北地区2～4号住居址掘り下げ、4号住は2軒、5号住とする。南地区遺構実測。

1月14日(金)晴 北地区2～5号住掘り下げ、3号住完掘写真撮影、3号住北で6号住検出。南北区遺構実測。

1月15日(土)休日

1月16日(日)休日

1月17日(月)曇り 北地区2、4～6号住掘り下げ。南地区遺構実測。午後雨のため作業中止

1月18日(火)積雪のため作業休み

1月19日(水)積雪のため作業休み

1月20日(木)積雪のため作業休み

1月21日(金)晴 北地区2号住は焼失家屋、炭化材、遺物実測取り上げ。

1月22日(土)晴 北地区住居址、遺構は△完掘、写真撮影。

1月23日(日)休日

1月24日(月)晴 遺構実測。

1月25日(火)職員研修のため作業休み

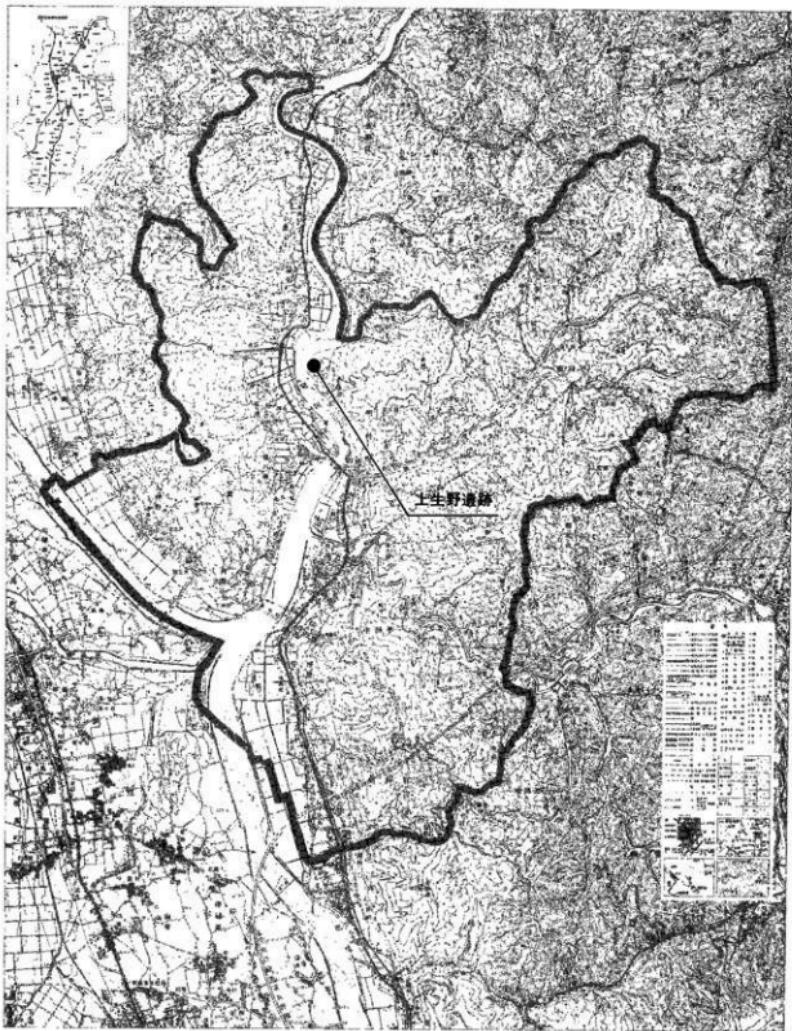
1月26日(水)職員研修のため作業休み

1月27日(木)職員研修のため作業休み

1月28日(金)晴 遺構実測。遺跡を巡回し遺物等の残り確認。本日で調査終了。

平成6年度

平成6年度は遺物整理と報告書の刊行を行った。遺物整理については町歴史民俗資料館で平成6年10月から翌7年3月まで遺物の洗浄、注記、復元、実測作業を一貫して行った。科学分析および原稿執筆、報告書の編集は平成7年1～3月にかけて行った。



第1図 調査地の位置

第2章 遺跡の環境

第1節 位置と地理的環境

上生野遺跡は、南北に細長く広がる松本盆地の北東端、犀川が松本盆地から離れて丘陵地の広谷部に入った右岸段丘上に立地し、JR篠ノ井線明科駅から北方へ2.5kmほどに位置する。氾濫原土(段丘堆積物上部の細粒部分)が部分的に広がる北地区と、扇状地堆積物や土石流堆積物におおわれた南地区に分かれる。

行政区域的に見ると、明科町大字東川手字上生野である。上生野地域は古代（7世紀後半以降）にあっては、更級郡麻績郷のうち日置（後に日岐）里に属し、国衙領であり複合の郷村として存続した。やがて国衙領が弱体化し武士勢力に蚕食され消滅の後は、古豪仁科氏の分かれである丸山氏に支配され、北につらなる生坂村小立野・下生野・上生坂・下生坂とともに対岸の日岐及び峯方を含めて日岐六郷と呼ばれる村々が発生した。上生野地域も、これによって独立した一村と成了。下って江戸時代は、下流域の村々とともに松本藩領麻績組（後に川手組）に属し、その後幕府領となつた。明治8年町村制の施行により、上流域の潮村や潮山中村などとともに東川手村をつくり、昭和30年中川手村との合併に伴い明科町となつた地域である。

ここは、松本盆地から丘陵地へ北流する犀川が穿入し、曲流によって形成された段丘である。曲流は犀川が水量の多いことや、川底や周辺部の岩石に硬軟の相違があるためなどから、河水の側方侵食の速さと河底を削る速さが並行せず、河底は緩やかになり生じたわけで、段丘の形状は三日月状を呈した220,000m²ほどの小規模な河成段丘（氾濫原より1段以上高く、洪水時にも冠水しなくなつた旧氾濫原）である。

段丘の海拔は540m～515mの範囲である。一般に後背山地からの崖壁・土石流・地滑りなど崩落性堆積物が山麓近くを厚く堆積して、段丘面原形を不明にしている。また、北半部では背後の溪流が弱小なため、崩落性堆積物の堆積は段丘端まで及んでいない。一方南半部は、宮沢のもたらした扇状地堆積物や土石流堆積物に覆われて斜面高度を高めており、先端は段丘端を溢流している。段丘崖は新鮮で、南部ほど犀川の側侵食を受けて基盤岩石が現であるが、中央部の公民館西方ではやや不明確となり、小規模な段丘面を思わせる。また犀川が曲流によつて流れを変えた北端の段丘崖下は、運動広場や砂利工場が所在する氾濫原が見られる。後背地からの溪流は、受水域が狭く普段流水に欠けており水利が乏しい。

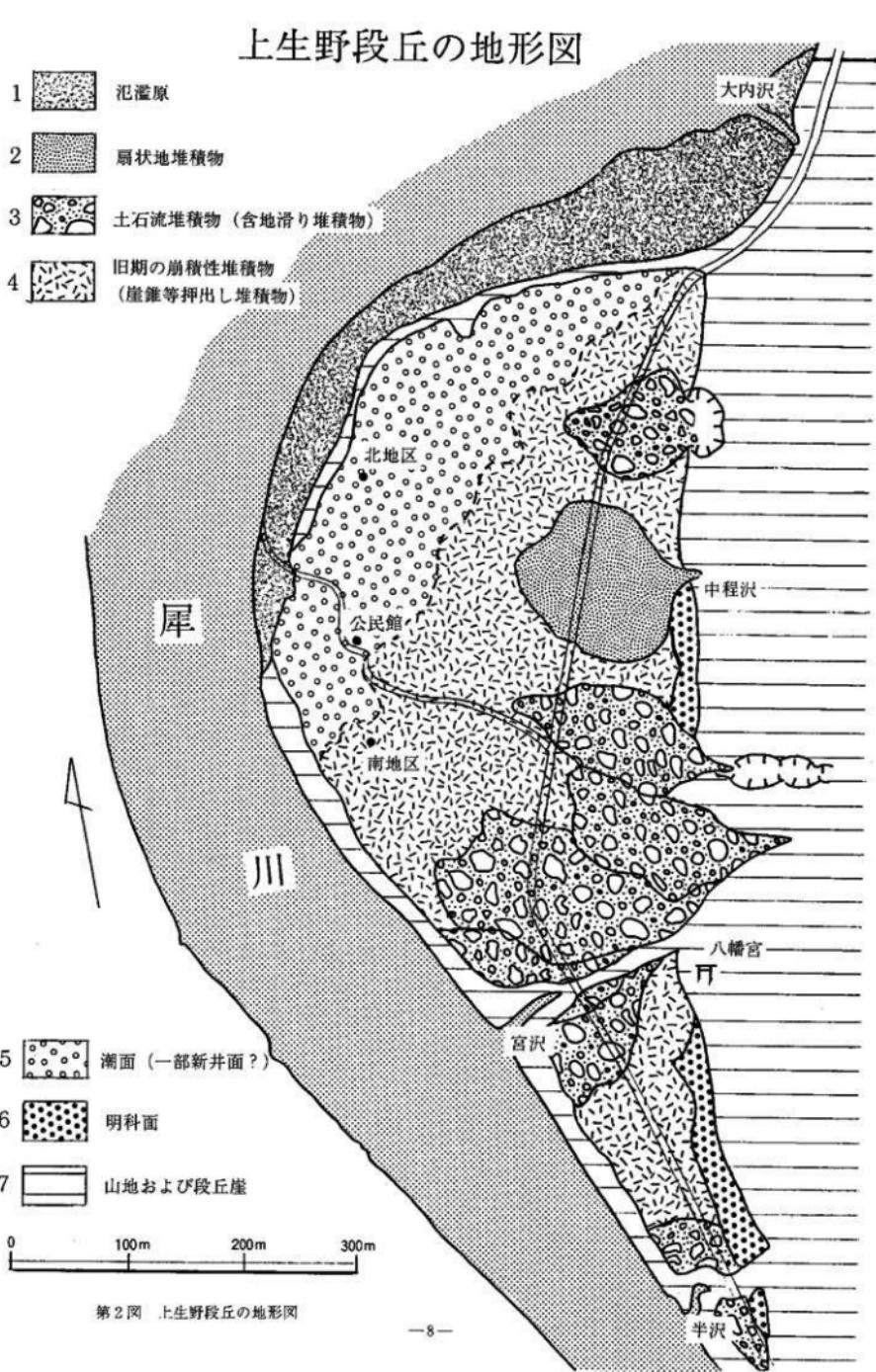
信府統記（1724年）によると、上生野村の寛文4年（1664年）の石高は76石6斗3升1合皆畠方と書かれており水利に欠けた生産力の低い畑作地であったことが伺える。水田耕作は戦後の食料不足によってようやく昭和21～23年にかけて畠地を整備し、犀川から電気揚水によって水を求めた85,000m²の開田からである。

犀川の広谷部は、山清路以南の犀川の曲流に沿った低地を指し、一般に生坂谷と呼んでいる。この谷あいには、小規模な段丘群が断続的に分布する。右岸に潮・上生野・小立野・上生坂・下生坂・雲根の各段丘群、左岸に塙川原・笠原・中村・小泉・日岐・草尾・大日向の各段丘群が見られる。犀川の曲流の外側は攻撃斜面となって山地にぶつかり、山肌を侵して急崖部をつくり、横手と呼ばれ段丘の連続性を断っている。一方、曲流の内側は、滑走斜面を形成して氾濫原土を堆積しており、基盤の間歇的隆起によって数段の段丘面が形成され、この面が主な生活の舞台となっている。

これらの段丘面は、低いものほど平坦である。また平坦面の傾斜は小さく、現河川に並行な傾きを示す。これに対して、高いものほど段丘面には河川の侵食の影響が見られ、平坦面の傾きも大きくなる傾向を示している。平坦面を取り巻いて発達する段丘崖は、低い段丘ほど地形的には新鮮で急斜面となり、高いものほど崩壊して原

上生野段丘の地形図

- 1 沼澤原
- 2 扇状地堆積物
- 3 土石流堆積物（含地滑り堆積物）
- 4 旧期の崩積性堆積物
(崖縦等押出し堆積物)



第2図 上生野段丘の地形図

- 5 潟面（一部新井面？）

- 6 明科面

- 7 山地および段丘崖

形を留めなくなっていることが多い。これらのがらは、既に河川の侵食によって平坦面の形成が進み、砂礫や土砂を堆積している過程で隆起運動が起こると、河川は狭い範囲に押し込まれて流れることになる。それによつて川は下刻を進め、谷底を削って元の平坦面より低い位置を流れるようになり、やがて隆起運動が小さくなるか止むかすると、その低い位置に新しく平坦面が形成される。このようなことが繰り返し行われれば谷の中には、幾重にも新しい谷が形成されて行き、古い平坦面は何段もの段丘面として残されて行く。こんな過程をたどりながら生坂谷の段丘は形成が進んだものと思われる。

生坂村誌自然編（1991）によると、生坂谷の段丘区分を広谷部では、段丘面の古いものから第Ⅰ段丘面群～第VII段丘面群に7区分している。そして尾根などの第Ⅰ～第II段丘面群を高位段丘に、山腹の第III～第V段丘面群は中位段丘として更新世後期の段丘面群に推定し、現犀川に沿う段丘面は、第VI～第VII段丘面群の低位段丘に区分して完新世の形成をしている。また明科町の遺跡（1994）では、低位段丘の第VI～第VII段丘面群の相当面を、古い順に南村面・北村面・明科面・潮面・荒井面に区分しており、上生野段丘は第VII段丘面群の潮面（一部は明科面）に比定している。

小口（1990）は松本盆地東縁断層の垂直変移量について、晩氷期以降～現在までの変移量は3.5～2.7mm／年と推定している。また仁科（1983）、平賀・市川（1988）などの研究では、大峰面形成期（60万年前）以後の松本盆地東縁断層の垂直変位量は、1.9mm／年としている。これらは、松本盆地に対して山地側がその変位量分だけ隆起したことを意味しており、過去数十万年前より晩氷期以降の隆起が活発であったことと判断される。従って、この隆起が間歇的な運動として丘陵地に働き、それが犀川の曲流と下刻に関係して生坂谷の段丘群は形成を見たものである。上生野段丘は遅くとも縄文時代後期初頭には離水していたものと思われる。

【参考・引用文献】

1. 小口 高 (1990) 松本盆地中部における活断層の垂直変移速度 活断層研究 No.8
2. 関 全寿 (1984) 明科町史上巻—地形・地質— 明科町史編纂会
- 3.〃 (1989) 松本盆地東縁河岸段丘における堆積過程の一様相
—北村遺跡の発掘を通して— 田中邦雄教授退官記念論文集
- 4.〃 (1991) 生坂村誌自然編—地形・地質— 生坂村誌編纂委員会
- 5.〃 (1994) 明科町の地形・地質と遺跡 明科町の埋蔵文化財第4集
6. 田中邦雄・関 全寿 (1966) 松本市北方の第三紀層 信大教育学部研究論集 No.15
7. 仁科 良夫 (1972) 大峰面の形成過程 地質学論集 No.7
- 8.〃 (1983) 松本盆地北部の陥没過程 地球科学 37巻 6号

第2節 歴史的環境

発掘調査開始前の分布調査や文献、地名の調査では、この上生野遺跡(517)は平安時代以降中世を中心とした時代の遺跡と予想されていたが、今回の調査で検出された遺構や遺物は、予想よりだいぶ時代を遡り、繩文時代中期、古墳時代、平安時代、中世の各時代にわたっている。そこで、上生野遺跡と同時期の周辺の遺跡の分布を概観すると、まず繩文時代では、前期から後期の大きな遺跡として上生野遺跡から南へ1.5kmに塩田若宮遺跡(512)があり、昭和44年の給食センター建設時に多くの遺物が出土している。さらに犀川上流4.5kmには高速道路工事に多くの人骨の出土した北村遺跡(301)がある。犀川を挟んだ対岸には中村経塚遺跡(115)とそれに続く石原遺跡(113)があり、昭和20年代の開田時に中期の遺物が出土している。その2km下流には昭和63～平成元年の調査で60軒余の住居址、配石造構と多くの遺物の出土したほうろく屋敷遺跡(101)がある。また、犀川右岸の下流の生坂村には、2km下流に小立野遺跡、さらに2km下流のほうろく屋敷遺跡対岸に田島遺跡があり、調査はされていないが土器や石器が出土している。

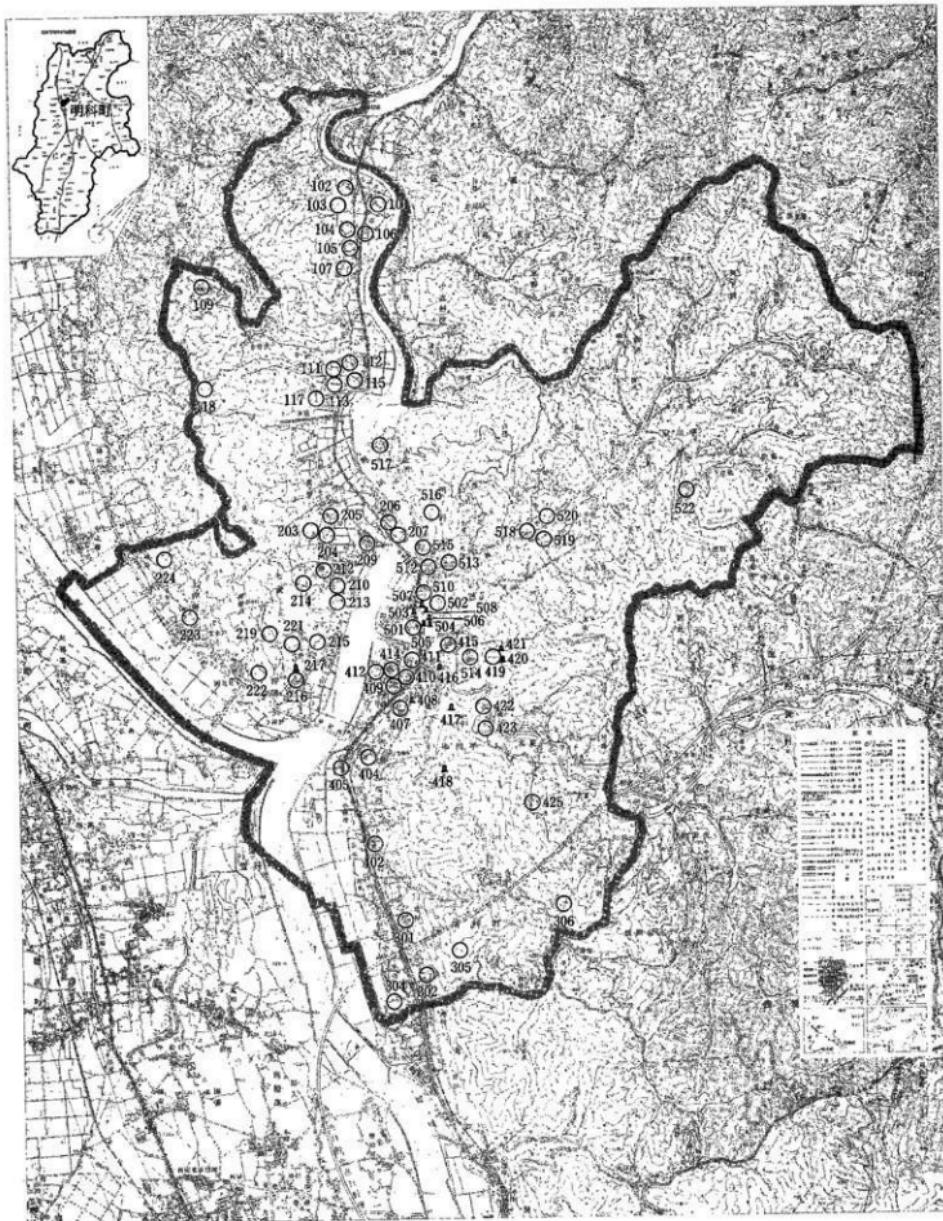
古墳時代では、明科町には潮金山塚古墳群の5基(503～507)、明科能念寺古墳群3基(416～418)、大足^{武士}平古墳群2基(420、421)のほか、明科上郷古墳(408)、押野上屋敷古墳(217)が知られているが、いずれも6世紀以前の小規模な古墳ばかりであり、上生野遺跡の4世紀前半に遡る古墳は見つかっていない。古墳時代の遺物の出土した遺跡は数も少なく古墳群のある明科地区を主に7遺跡のみであり、いずれも5世紀以降の遺跡である。龍門淵遺跡(412)は5世紀代の祭祀遺跡と考えられる遺跡で、埴や鹽、高杯などが出土している。龍門淵遺跡の続きにある栄町遺跡(411)でも古墳時代後期の土器がみられることから現明科町役場から南方の龍門寺にかけて古墳時代の集落が想定され、律令期7世紀末には明科庵寺(409)がつくられている。なお古墳群がある潮地区からは現在まで古墳時代の遺物は見つかっていないが、調査が進めば発見される可能性は強い。

平安時代には上生野地区は下流の小立野、下生野、上生坂、下生坂、などとともに更級郡麻績郷日置の里に属し、日岐六郷と呼ばれ国衙領であった。この時代の遺跡は下流の生坂村では調査が進んでいないことから日岐六郷を示す遺跡ははっきりしないが、下生野田島遺跡では灰釉陶器の出土が、日岐の本郷であり、郷社日置神社のある上生坂の万平遺跡で土師器の出土が知られている。

犀川上流の潮や明科は、おそらく安曇郡前科郷川手に属して日置里同様国衙領であったと考えられている。平安時代には潮や明科の今の町並みのあるところには、北から木戸橋ノ爪遺跡(515)、塩田若宮遺跡(512)、新屋遺跡(502)、潮橋ノ爪遺跡(501)、栄町遺跡(411)、本町遺跡(414)、県町遺跡(410)、上郷遺跡(407)など一連の大きな集落が営まれていた。

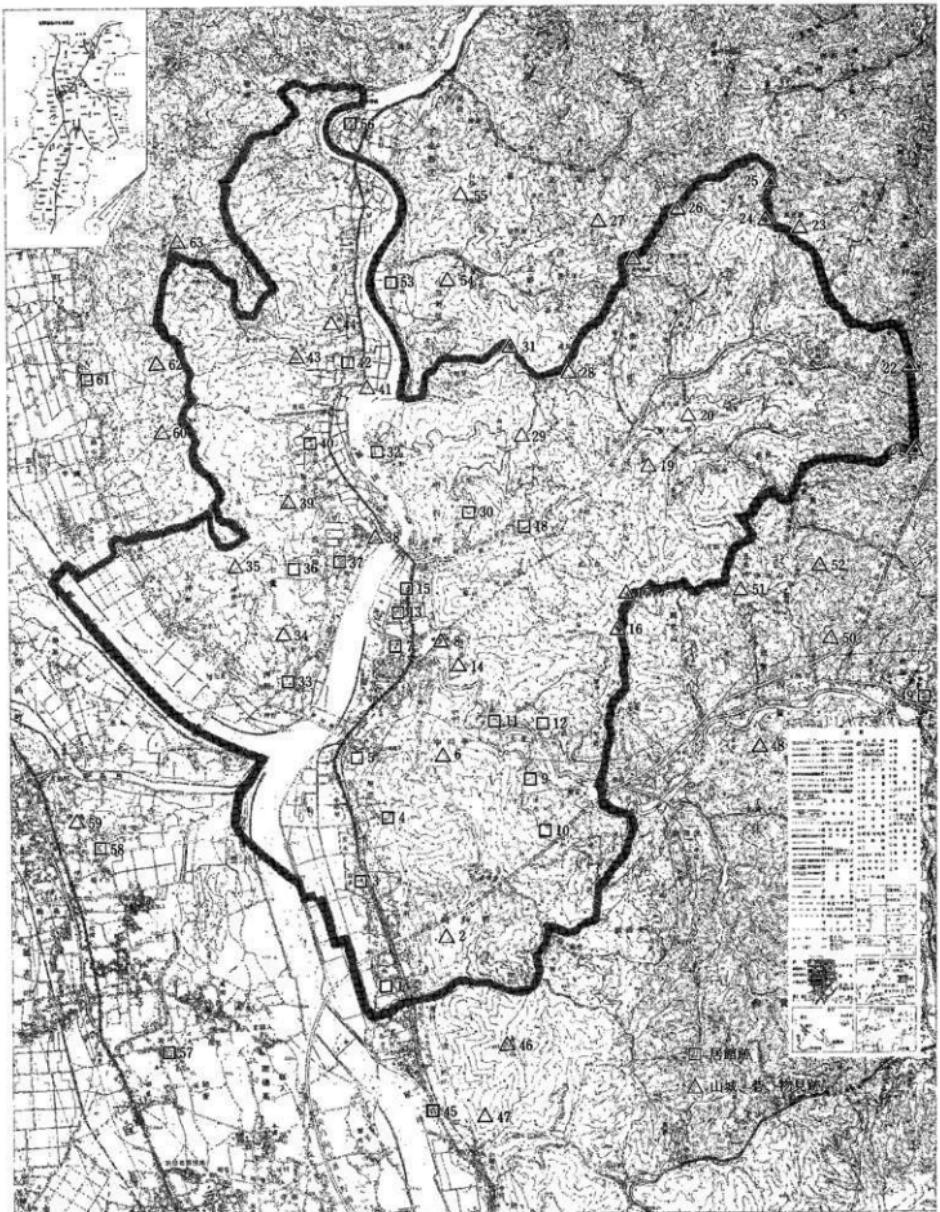
犀川対岸の七貴荻原から下流の陸郷小泉地区は前科郷大穴里に属し、平安時代後期永曆元年(1160)には大穴庄として藤原氏の庄園となっていたことが「高野山文書」に見え、鎌倉時代後期まで所有者を替えながら存続する。遺跡としては、平安時代の住居址20軒が検出されたほうろく屋敷遺跡(101)、その上段の段丘にある竹原遺跡(104)、北原遺跡(106)、上ノ段遺跡(105)、櫻平遺跡(107)など小泉に集中する。大穴神社のある中村地区では、石原遺跡(113)から須恵器の出土が知られるのみである。荻原地区では、宮原に9基の古窯址(204)があり、その周辺に宮原遺跡(203)、宮ノ前遺跡(205)、みどりヶ丘遺跡(209)、塩川原遺跡(210)が同じ段丘上に展開している。

中世に入ると、上生野地区の動向は文献に登場することもなくはっきりとしないが、日岐郷の一部として室町時代以降は大町の仁科氏の分流である丸山氏の支配下にあったものと思われる。犀川上流の川手地域は鎌倉時代



第3図 明科町遺跡分布図

番号	遺跡名	所在地	立地	旧 石 器				縄 文				弥 生				古 墳 期				
				縄 文	弥 生	古 墳 期	古 墳 期	縄 文	弥 生	古 墳 期	古 墳 期	縄 文	弥 生	古 墳 期	古 墳 期	縄 文	弥 生	古 墳 期	古 墳 期	
101	ほうろく 京殿	南津野小畠	犀川段丘	○○○○○	○○○○○○○	○	○	404	上平塚原	中川町綱原	犀川段丘	○○○	○○○○○	○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	○○○○○	
102	高松寺跡	〃	犀川段丘					○		405	町並敷	〃	犀川段丘							○
103	鶴 ^{ハク} 芋 ^{ヒナギ}	〃	犀川段丘		打製石斧			407	明治酒跡 ^{マツリ} 上築	〃	上平塚原	犀川段丘	○	○	○○					
104	竹原	〃	犀川段丘		打製石斧、磨制石斧	○○○		408	上平塚原	〃	山腹								○	
105	羊 ^{ヒツジ} 籠 ^{カゴ}	〃	犀川段丘			○		409	前田 ^{マツダ} 第 ^{トド} 1号	〃	解町	犀川段丘							○○○○	
106	北原	〃	犀川段丘		打製石斧、石點	○○		410	第 ^{トド} 2号	〃	犀川段丘								○○○○	
107	鶴芋 ^{ハクヒナギ}	〃	犀川段丘			○		411	竹 ^{タケ} 前 ^{マサニ}	〃	榮町	犀川段丘							○○○○	
109	京御寺 ^{キョウゴシ}	〃	金井沢	山腹			○	412	越門 ^{カムイ} 門 ^{モン} 1号	〃	本町	犀川段丘							○○○○	
111	蛭井寺跡 ^{スジイ}	〃	中村	犀川段丘			○	414	木 ^キ 前 ^{マサニ} 木附 ^{キタタキ}	〃	犀川段丘							○○○○○○		
112	寺端	〃	犀川段丘		打製石斧			415	こや城	東東京	金井川河岸段丘	○○○	○○○○○○	○○○○○○	○○○○○○					
113	石原	〃	犀川段丘	○		○		416	鶴見寺 ^{タカミ} 1号	〃	山腹								○	
115	中村莊屋 ^{マチムラ}	〃	犀川段丘	○		417	2号 ^{トド} 堆 ^{カムイ}	〃	山頂										○	
117	鶴林 ^{タカリ} 平 ^{ヒラ}	〃	犀川段丘		绳文土器			418	3号 ^{トド}	町舎地	山腹の平地								○	
118	草 ^{ハラ} 山 ^{ヤマ}	〃	山腹		打製石斧			419	武 ^{タケ} 2号 ^{トド}	大足	金井川河岸段丘								○○○○○○	
203	苔原	七戸 萩原	山腹	○○	○○○○			420	武士平 ^{タケ} 1号古墳	〃	金井川河岸段丘								○	
204	宮原古跡跡 ^{マツラ}	〃	山腹			○		421	2号古墳	〃	金井川河岸段丘								○	
205	菅 ^{スゲ} ノ前 ^{マサニ}	〃	犀川段丘	○○		○○		422	松 ^{マツ} 中 ^{トド}	大足	中	?	○	○						
206	蓬井 ^{ボウイ}	〃	犀川段丘	○				432	葛 ^{カズラ} 下 ^{トド}	〃	山腹								○	
207	伊勢宮 ^{イセノミコト}	〃	犀川段丘	○○				425	荒久寺 ^{アラクニ} 清水 ^{ミズ}	〃	山腹								○	
209	みどりヶ丘 ^{ミドリカヨ}	〃	犀川段丘	○○	○○○○○○○			501	諸 ^{ハラタカ} 道 ^{ミサカ} 跡 ^{カツ}	東川手原	犀川段丘								○○○○	
210	塙原 ^{ハラタカ}	〃	犀川段丘	○○	○○○○○○○	○		502	新 ^{ハラタカ}	〃	犀川段丘								○○○○	
212	板 ^{ハタケ} 吉 ^{ヨシ} 跡 ^{カツ}	〃	山腹			○○		503	金山 ^{キンセン} 古墳 ^{コブン}	〃	犀川段丘								○	
213	新 ^{ハラタカ} 吉 ^{ヨシ} 跡 ^{カツ}	〃	犀川段丘	○○				504	2号 ^{トド}	〃	犀川段丘								○	
215	下 ^シ 野 ^ノ 野 ^ノ	下押野 ^{シタハラ}	犀川段丘	○		○○	○	505	3号 ^{トド}	〃	犀川段丘								○	
216	やしき	〃	犀川段丘	○		○○	○	506	4号 ^{トド}	〃	犀川段丘								○	
217	上 ^シ 野 ^ノ 古 ^{コブン}	〃	犀川段丘				○	507	5号 ^{トド}	〃	犀川段丘								○	
219	新 ^{ハラタカ} 道 ^{ミサカ} 跡 ^{カツ} 野 ^ノ 野 ^ノ 野 ^ノ	〃	山腹	○			○	508	諸 ^{ハラタカ} 道 ^{ミサカ} 跡 ^{カツ}	犀川段丘								○		
221	城 ^{シテ} 平 ^{ヒラ}	〃	山腹	○			○	510	新 ^{ハラタカ}	〃	犀川段丘								○○○○○○	
223	仲 ^{ハタケ} 野 ^ノ 野 ^ノ	上押野 ^{シタハラ}	山腹	○			○	512	諸 ^{ハラタカ} 道 ^{ミサカ} 跡 ^{カツ}	犀川段丘		○○○	○○○○○○	○○○○○○	○○○○○○	○○○○○○	○○○○○○	○○○○○○		
225	申木 ^{ハタケ} 芦 ^{シロ}	上押野 ^{シタハラ}	山腹					513	三 ^ミ 五 ^ゴ 山 ^{サンゴ}	犀川段丘		○○○	○○○○○○	○○○○○○	○○○○○○	○○○○○○	○○○○○○	○○○○○○		
224	焚 ^{ハラタカ} 墓 ^{ツブ}	〃	高龜川 ^{タカツチガワ} 河岸段丘					514	基 ^{ハラタカ} 山 ^{ハラタカ}	〃	山腹								○	
301	光道跡 ^{カツル} 野 ^ノ 野 ^ノ	光 北村	犀川段丘	○○	○○○○○○○			515	木戸 ^{カト} 橋 ^{ハシ}	木戸	犀川	自然地帶							○○	
302	中 ^{ハタケ} 条 ^{ハタケ}	中条	犀川段丘			○○○		516	大久桑 ^{オクサ}	大久保	山腹								○	
304	吉 ^{ハラタカ} 原 ^{ハラタカ}	〃	犀川段丘				○	517	上生野 ^{ウエノ}	上生野	犀川段丘		○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	○○○○○○○	
305	しょうぶ平 ^{ヒラ}	〃	山腹の平地 ^{ハラタカ}				○	519	山中 ^{サン} 中 ^{ハタケ}	山中	谷合の平地		○						○	
306	焚 ^{ハラタカ} 芋 ^{ヒナギ}	〃	山腹の平地 ^{ハラタカ}	石點、スクレイパー	○○○○			520	土 ^ト 廢 ^{ハラタカ}	山中	山腹								○	
402	犀 ^{ハラタカ} 宮 ^{ハラタカ}	中川手宮本	犀川段丘				○	522	民 ^{ハラタカ} 農 ^{ハラタカ}	庄原	山腹	打製石斧								



第4図 明科町周辺の中世城館址分布図

後期に東信地方から新補地頭として進出した海野氏一族が支配し、それぞれに塔原、光と土地の名を名乗っている。塔原氏の居館は上手屋敷遺跡にあり、光氏は豊科町田沢の町田館に居館を構えていた。さらにこれら的一族郎党が潮から塔ノ原、光にかけて屋敷を構えていたものと見え、古屋敷、古殿屋敷などの小字が残る。

明科町周辺の中世城館跡分布図

1. 中城館	(明科町 光)	33. 押野上屋敷	(明科町七貴)
2. 中城池の平	(〃 〃)	34. 押野城	(〃 〃)
3. 納然寺古屋敷	(〃 中川手)	35. 白沢砦	(〃 〃)
4. 法音寺館	(〃 〃)	36. くねの中館	(〃 〃)
5. 上手屋敷	(〃 〃)	37. 内堀館	(〃 〃)
6. 塔の原城	(〃 〃)	38. 狐城	(〃 〃)
7. 明科古屋敷	(〃 〃)	39. 萩原城	(〃 〃)
8. こや城	(〃 〃)	40. 萩原古屋敷	(〃 〃)
9. 清水海渡	(〃 〃)	41. 小丸山砦	(〃 南陸郷)
10. 清水古屋敷	(〃 〃)	42. 中村殿田館	(〃 〃)
11. 大足平館	(〃 〃)	43. 中村城	(〃 〃)
12. 中沢古屋敷	(〃 〃)	44. 神谷の物見	(〃 〃)
13. 潮古屋敷	(〃 東川手)	45. 町田館	(豊科町 光)
14. 茶臼山城	(〃 〃)	46. 光城	(〃 〃)
15. 潮古殿屋敷	(〃 〃)	47. 田沢城	(〃 田沢)
16. 佐々野城	(〃 〃)	48. 笹沢城	(四賀村五常)
17. 三峯城	(〃 〃)	49. 駿村館	(〃 会田)
18. 山中殿屋敷	(〃 〃)	50. 西ノ宮笠城	(〃 五常)
19. 花見城	(〃 〃)	51. 鍋山城砦	(〃 〃)
20. 高見砦	(〃 〃)	52. 雨戸屋城	(〃 〃)
21. 物見岩砦	(〃 〃)	53. 小立野館	(生坂村小立野)
22. 城二の峯	(〃 〃)	54. 中野山城	(〃 〃)
23. 鳥屋敷城	(〃 〃)	55. 小池城	(〃 〃)
24. 高登屋物見	(〃 〃)	56. 中海道	(〃 下生野)
25. たかうちば物見	(〃 〃)	57. 細萱氏館	(豊科町南穂高)
26. 猿が城砦	(〃 〃)	58. 等々力館	(穗高町穗高)
27. 高松葉箭城	(〃 〃)	59. 等々力城	(〃 〃)
28. 大峰物見	(〃 〃)	60. 鶴山城	(池田町鶴山)
29. 梨子峯物見	(〃 〃)	61. 渋田見館	(〃 会染)
30. 小芹殿畠	(〃 〃)	62. 渋田見城	(〃 〃)
31. 川はさま砦	(〃 〃)	63. 田ノ入城	(〃 北陸郷)
32. 西堀館	(〃 〃)		

第3章 遺構と遺物

第1節 調査の概要

今回の調査対象である上生野遺跡は、昭和53年からの明科町史編纂時の地区の聞き取り調査で明らかになった遺跡であり、遺跡の規模、時代などほとんど解明されていない遺跡である。保護協議前の教育委員会の踏査でも遺物はまったく採集されていなかったため、調査に当たっては小字「西堀、くね内、中村」「みとふじ」という中世の以降の存在を思わせる地名の残る2地点と、昭和32年ころの県道下生野明科線の拡幅工事に伴って灰釉陶器の出土したと伝えられる地点の計3地点を中心に試掘のトレンチをいれ、遺構が検出された地点を本調査することとした。

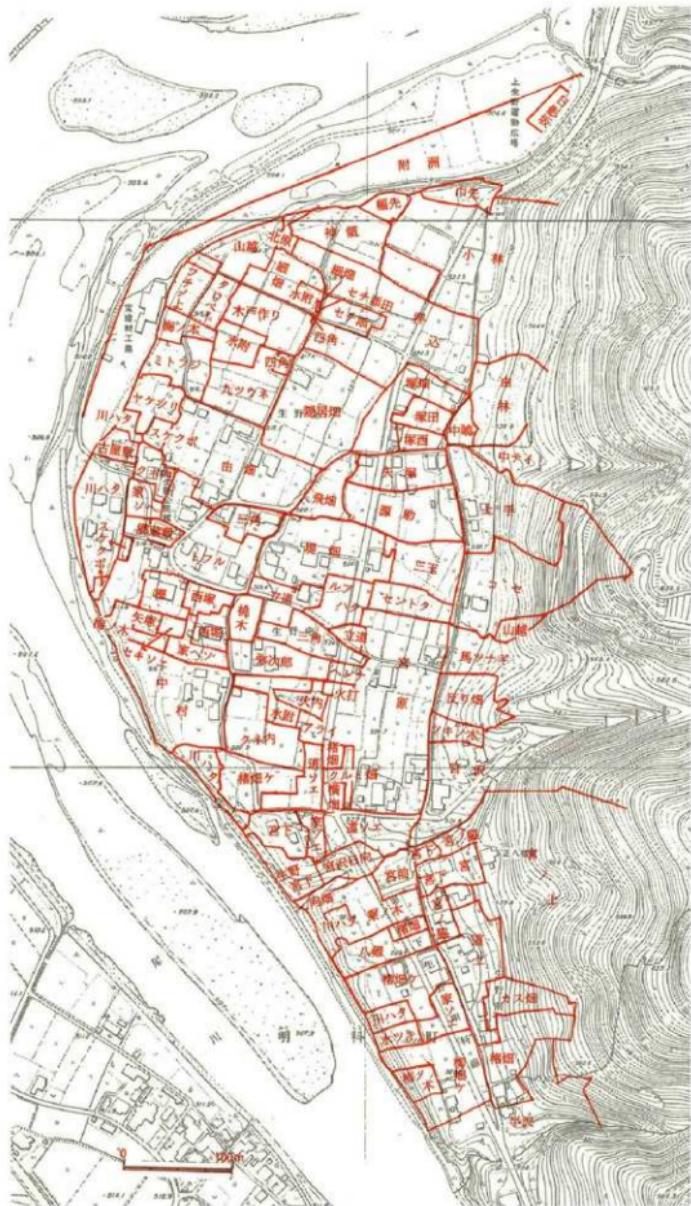
トレンチは小字「みとふじ」を中心に1～3、小字「塚畠」には4、灰釉陶器の出土地点を中心に5～6、小字「西堀、くね内、中村」を中心に7～14と合計14の幅2メートルのトレンチを設定し、重機による掘削を1～6トレンチは12月7日から9日まで、7～14トレンチは12月10日から16日にかけて実施した。

結果は、1トレンチからは土師器や須恵器の破片とともに住居址やピットなどが検出された。2トレンチでは、1トレンチとの交差地点付近から建物の基壇状の遺構が検出されたが、東に行くにしたがって湿地となり遺構遺物はみられなかった。3トレンチは、全体が湿地で遺構遺物の出土はみられなかった。4トレンチは県道下の小字「塚畠」地点は地下2メートル付近まで山からの崩落土に覆われており遺物がみられず、西へいくにしたがって崩落土が薄くなつたがやはり遺構遺物はみられなかった。5トレンチは、灰釉陶器の出土が伝えられる地点であったが、やはり崩落土が厚く一部に焼土がみられたが、遺物はみられなかった。6トレンチは崩落土はなかつたが、全体に湿地でわずかに土師器が検出された。7トレンチは宮沢からの厚い堆積物で覆われており地下1.8メートル付近に黒色土の堆積がみられた。8～11トレンチでは、地表下60～70センチで溝が検出され、中世陶器片などがみられた。12トレンチは東側で宮沢の押し出しによる土砂の堆積がみられたが、西側はすぐに水が滲みだすような湿地であった。13、14トレンチは地表下1.45メートルで焼土がみられ若干の土器片も検出された。

以上のような試掘の結果に基づき本調査を1トレンチ及び8～11トレンチの2か所を中心に行うこととし、焼土のみられた5、13、14トレンチについては、検出面が1、5メートルと深く工事による影響がないことと、ば場整備後の耕作を考慮するとあまり深い地点の調査は困難であることから本調査は行わないこととした。

調査は遺構の検出されたトレンチを拡張して行うこととし、重機による表土の削平を行った。調査地点が、2ヶ所に分かれるため、1トレンチを北地区、8～11トレンチを南地区とし、先に試掘を行った北地区的調査を行った。

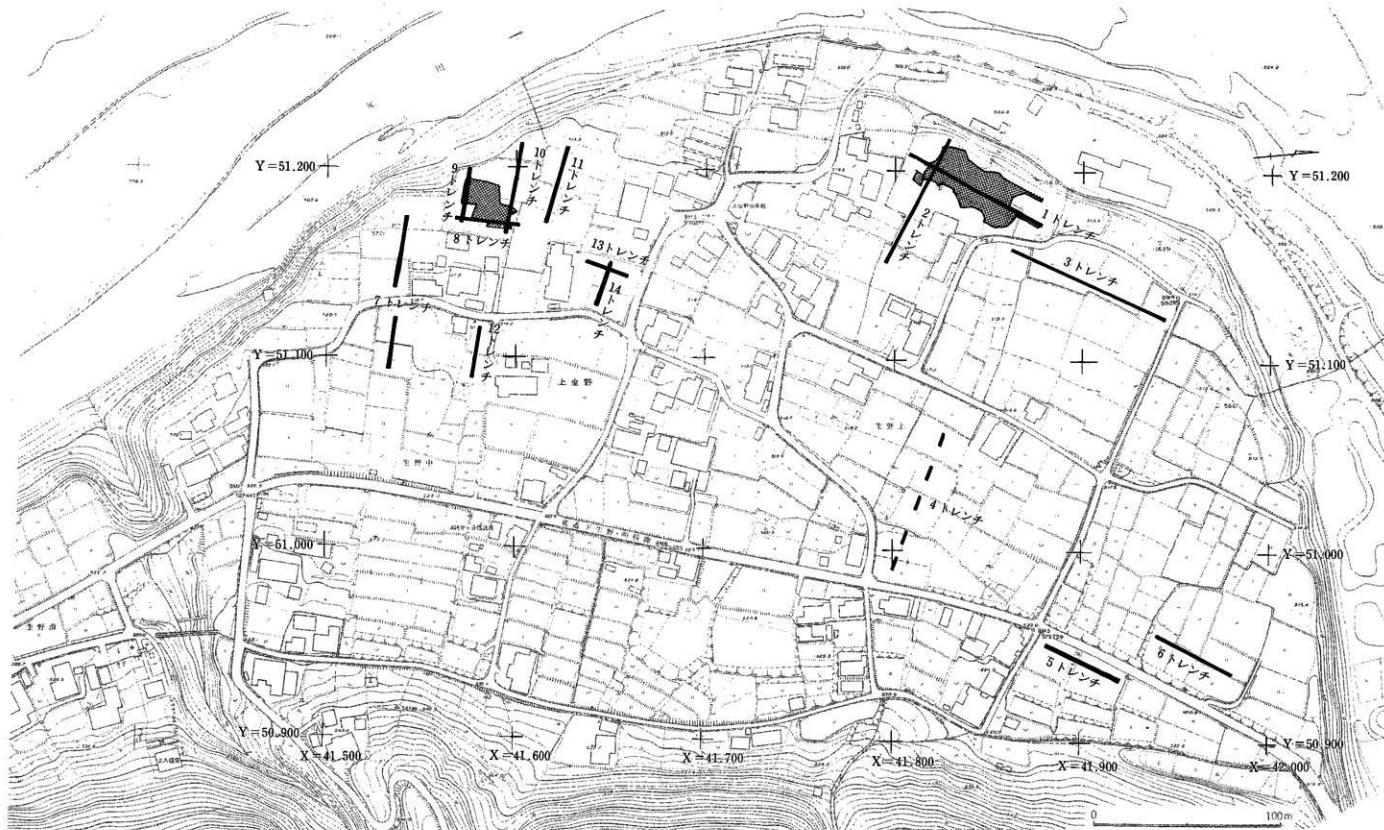
北地区では、試掘で検出された住居址を1号住居址とし、1号住居址東から南に柱穴群があり、1号住居址の東の柱穴群では2棟の掘立建物址が想定されそれぞれ1号、2号建物址とした。これらの遺構の調査が一段落した1月に入つてさらに西側に遺構の存在が想定されることから、トレンチを入れたところ3軒ほどの竪穴住居址が検出され、それぞれ2、3、4号住居址とした。さらに4号住居址の調査過程で2軒あることが判明したため5号住居址とし、さらに3号住居址北側にわずかな床面とカマドの跡が判明したため6号住居址とした。6号住居址は当初縄文時代中期末の土器が出土したため縄文時代とも考えたが、カマド内の土器から平安時代と判断した。縄文時代中期の土器は埋甕のような出土状態であったので、住居址の可能性を追及したが判然としなかった。調査区南端の建物の基壇上の石組遺構は、地元の古者の証言では井戸が付近にあったということで井戸の可能性



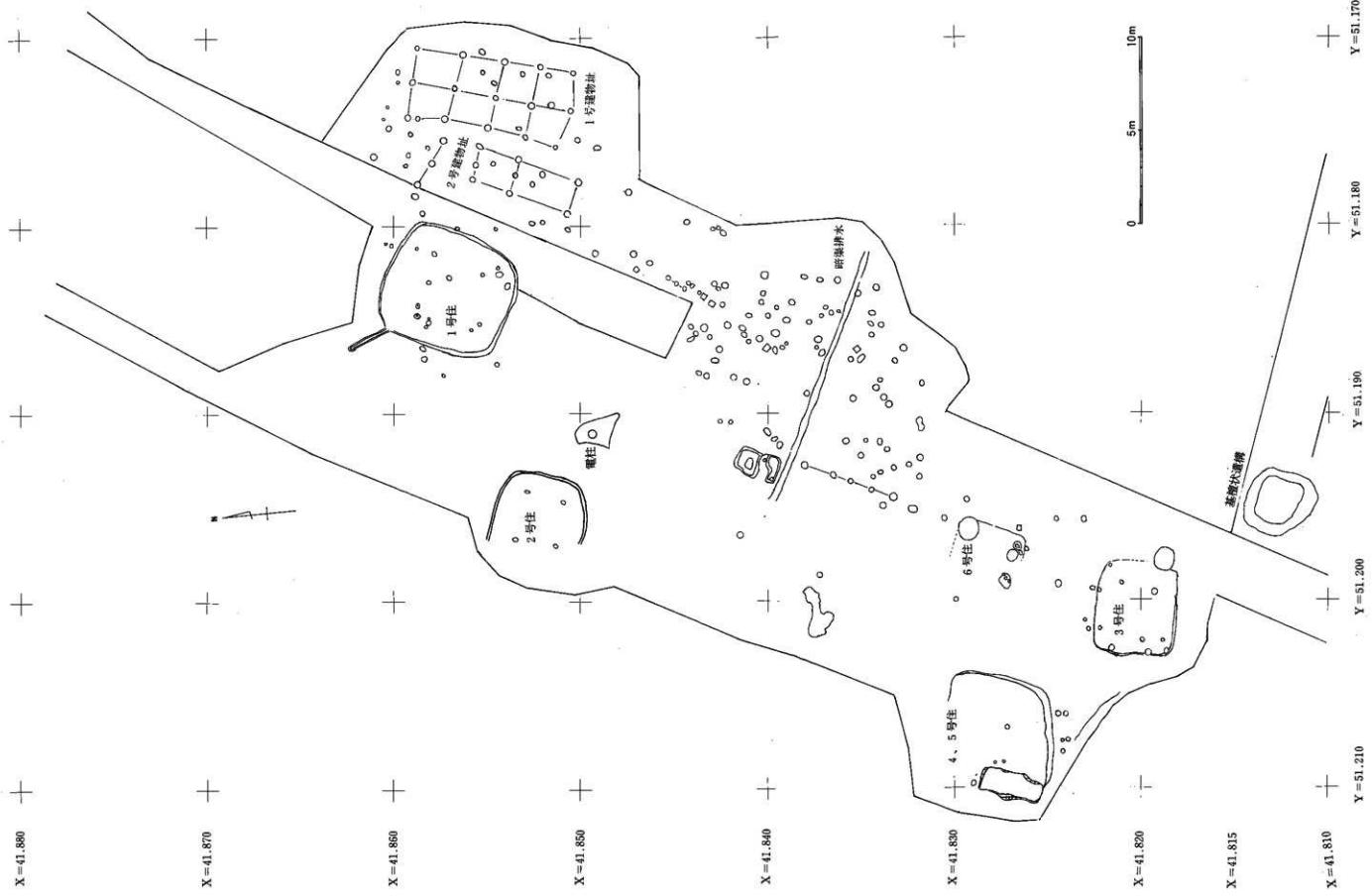
第5図 上生野小字切図

も考慮して調査を行ったが、井戸ではなく、小祠の基壇と思われるが古者によるとそうした伝承はないとのことで判然としなかった。

南地区では、試掘で検出された溝跡を手掛かりに、溝の範囲を確認するための小トレンチを重機によって何本か掘削し、発掘の範囲を確定した。最初に溝を確認した地表下70cmでは、中世陶器の破片とともに建物の土台と思われる石敷列造構や、灰や炭化物の詰まった土壌などが検出されたが、調査日程の都合で地点を記録するのみで実測は行なえなかった。また溝跡は西に行くに従って造構の確認が困難になつたため、石列造構を掘削し、場所によっては地表下1mくらいまで表土を掘削した。溝は、犀川に並行する南北の溝が2本確認され、この溝に流れ込む犀川に直交する東西方向の溝が2本検出された。南北の溝は合流し、東西へ方向を変え犀川へ流れ込むと想定される。調査地点は小扇状地の先端にあたり湧水地帯となっていることから、生活用水と排水の両面を持つ溝であると考えられるが、調査面積が掘削深度の関係で耕作に影響することから限られたため、中世の土蔵の居館を想定していたが判然としなかった。



第6図 検査区設定図



第7図 北地区遺構全体図

第2節 造構と遺物

(1) 繩文時代の造構と遺物

繩文時代の造構として北地区から土壤と埋甕が検出されている。北地区は耕作土の下がすぐに地山で後世の搅乱が著しいため、全体に造構の残りは良いとはいえない。中でも埋甕については住居址の可能性もあるため、慎重に調査したが、平安時代の住居址に切られれていることもあってはっきりしなかった。地形的にみるとさらに1段上の段丘上に繩文時代の集落が考えられるが、山からの厚い堆積物に覆われており今回の調査ではわからなかった。

○土壤

検出 2号住居址と4号住居址のほぼ中間に位置し、周辺には小ピットが2つあるのみで他の造構はない。地山である黄褐色土を掘込んでおり、形状からするといくつかのピットや土壤の集合とも考えられる。

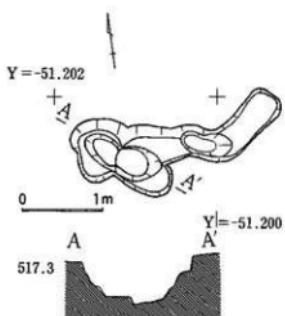
遺物 繩文時代中期後葉の土器破片が2点出土している。(第10図1、2)

○埋甕

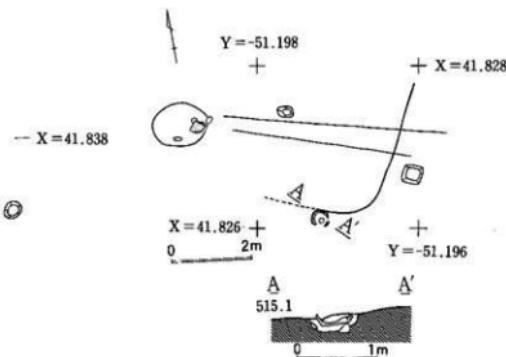
検出 6号住居址の南東壁のすぐ外側にあり、造構検出作業中に検出されたため、住居址の存在を考え調査したが、平安時代の6号住居址の搅乱を受けていることもあります。埋甕の北西3メートルほどに住居址の炉らしき焼けた石を伴ったピットが検出されてはいるが、住居址と断定するに至らなかった。

遺物 深鉢形土器の肩下半部の約1/3が残存している。色調は灰茶褐色、焼成が甘いため内外面ともに風化が進んでいる。底部の径は約15センチ、底部から上15センチが残存している。風化が進み文様構成ははつきりしないが、底部に近い5センチほどは無文帯となり、肩上部より垂下する隆帯がU字状になるものと、懸垂文となるのものが交互に施され、U字状の区画の中は沈線の粗い綾糸が施されている。中期後半曾利IV式段階に位置付けられよう。(第11図3)。

第12図①は基部を欠く珪化頁岩製の打製石斧で灰白色を呈する。頻繁に使用されたためか刃部を中心に部分的に磨滅している。



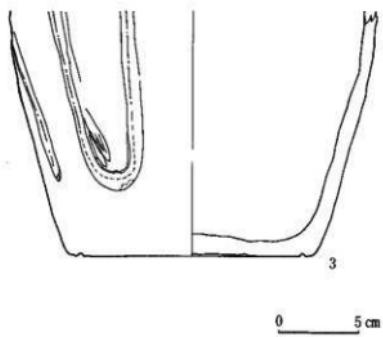
第8図 繩文土壤



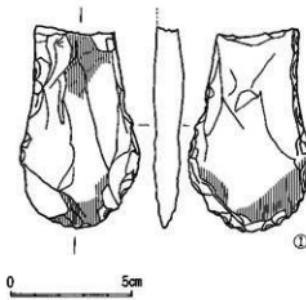
第9図 埋甕



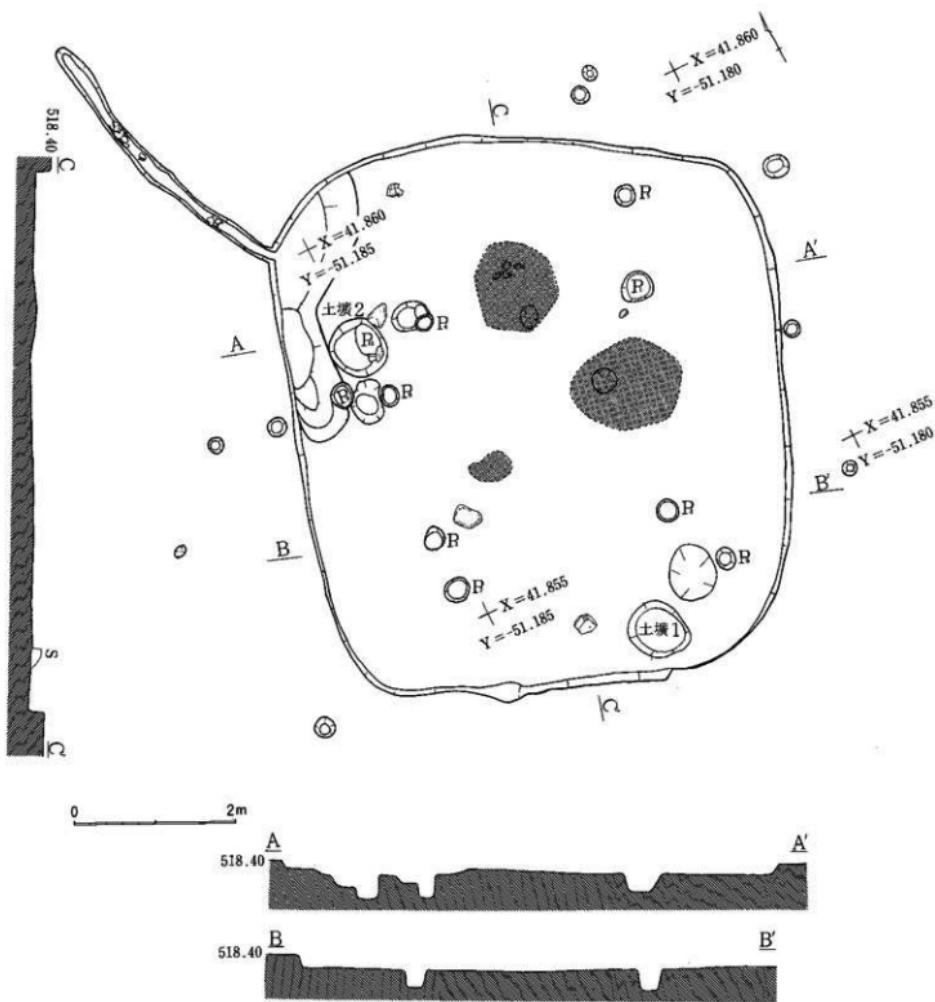
第10図 純文土壤内出土土器 (1:3)



第11図 埋甌 (1:3)



第12図 埋甌付近出土石器 (1:2)



第13図 1号住居址

(2) 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構として北地区から住居址 2軒、掘立建物址 2棟が検出されている。縄文時代の項でも述べたように、北地区は表土が浅く全体が耕作による擾乱を受けており、2号住居址などは緩やかに犀川に向かって傾斜していることもあり、1／3ほど西の壁を欠いている。1、2号住居址付近から北側は地山が砂質の黄褐色粘土層で、さらに北側に続いており、古墳時代前期には自然堤防的な微高地であったと思われ、遺構の存在がさらに北側にも考えられるが日程上の都合で調査できなかった。

なお、古墳時代前期の住居址の検出は明科町では初めてである。明科町では古墳時代後期の古墳が、明科、潮地区に数基づつ存在が知られており、付近で集落の存在を裏付ける遺物が採集されているが、同地区が住宅密集地であり調査が進んでいないこともあり古墳時代前期に遡る遺物は未検出である。しかし、明科が交通の要所であることから考えると、古墳時代前期の集落や古墳が存在した可能性は十分考えられる。

1) 住居址

1 第1号住居址

検出 試掘トレンチを重機で掘削中に検出された。北地区でも最も北にあり、東側に近接して建物址 2棟があり、南西 5 メートルに 2号住居址があり、東には 1号・2号建物址が近接する。

規模・形状 7m × 6m の隅丸の長方形のプラン。主軸は N15°E。北西のコーナーから幅 20cm、長さ 3.7m の溝がやや右にカーブしながら伸びている。住居址の北西隅は幅 50~80cm、高さ 30cm、長さ南へ 2.3m、東へ 1.3m のテラス状に 1段高くなっている。

埋土 耕作による擾乱などがあり細分できないが、若干の炭化物が混じった茶褐色である。

床面・壁 床はほぼ平坦で良好だが、土質のためかあまり堅くはない。壁は、東側が試掘トレンチのため削平されているほかに、耕作の影響が大きい。壁は高さほど 20cm ほどで、急角度で立ち上がる。

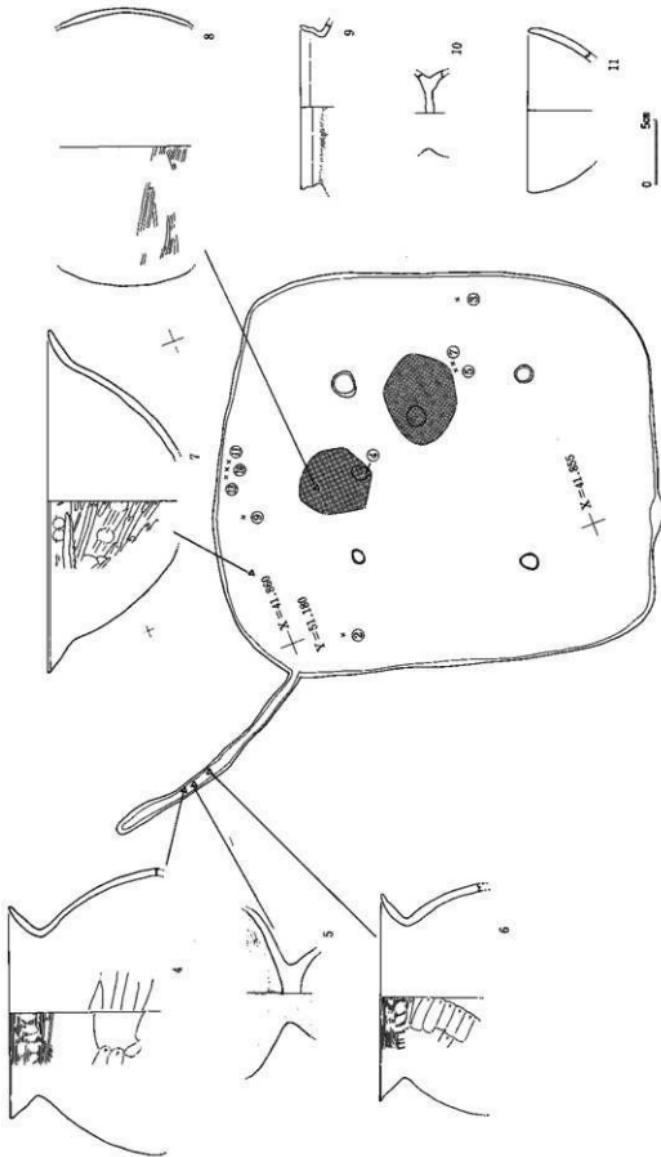
炉 炭化物の混じった焼土が 3ヵ所から検出されているが、住居址北側の主柱穴の間が炉で、直径 20cm ほどの浅いピットが炉心であろう。

柱穴 主柱穴は P₁～P₆ であるが、P₅～P₆ も使われた可能性はある。P₁ 土壌 2 は近世の遺構である。

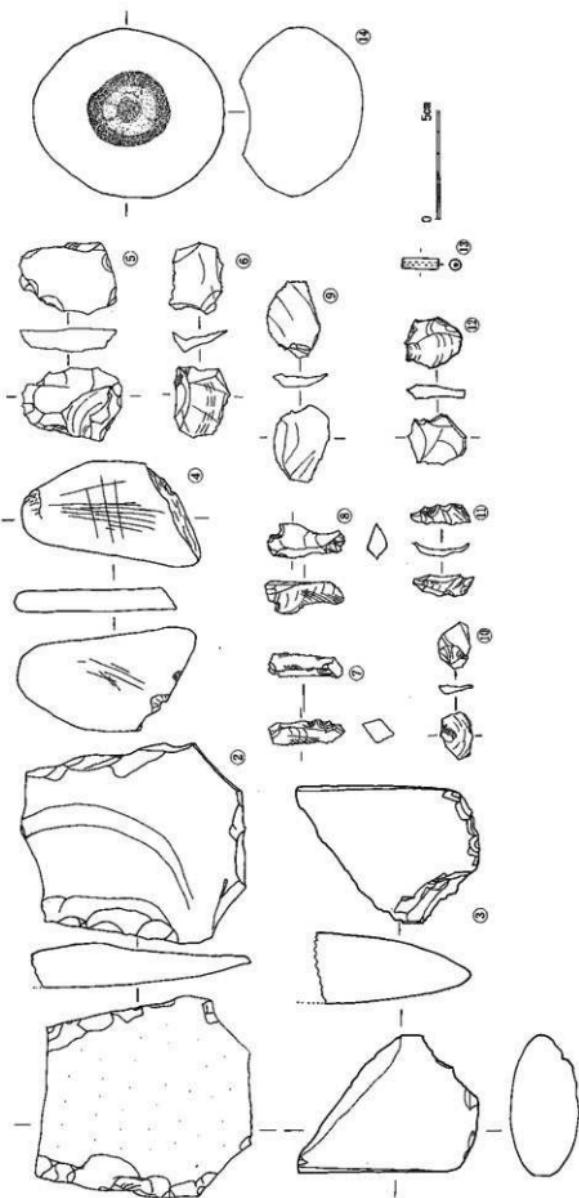
遺物の出土状況 溝の中から土師器の壺と高杯、住居址北壁の付近から高杯が、炉址からは壺が出土し、石器は北壁の付近と炉址や、東側の焼土の付近から出土している。(第14図 4～11 第15図②～⑨)

遺物 土器として土師器の壺(4、6、8、9、10) 高杯(5、8、11)などがある。4は土師器の壺で、口径 15.1cm を測る。器面調整は口縁部がヨコナデで線状の痕跡が残り、胴部は内面が板状工具による横位のナデ、内面が雑なケズリとなっている。薄橙色を呈し、焼成は良いが胎土にφ 1～3 mm の石英粒を多量に含む。口縁 1／4、胴部約 1／6 の残存である。5は土師器の高杯で、杯・脚接合部周辺が残存しているのみである。器面が荒れていて細かい調整は不明だが、杯部内外面と脚部外面に僅かにミガキと赤彩が観察できる。6は土師器の壺で、口径 15.7cm を測る。器面調整は口縁部がヨコナデで線状の痕跡が残るが、外面はヨコナデの前に頸部にかけて幅 5 mm 前後の工具で斜めにケズリを行った跡がみられる。胴部外面は斜め～横位の雑なケズリ、内面は横位の板ナデが行われている。色調は薄橙～暗褐色を呈し、焼成は良い。胴部の器肉はかなり薄く仕上げられている。胎土にφ 1～2 mm の石英、雲母粒を多量に含む。口縁、胴部 1／3 残存。7は土師器の大型の鉢または高杯の杯部になると思われるもので、口径は 26.1cm を測る。器面調整は、外面は斜めのケズリの後に幅 5 mm くらいの工具でミガキを意識したような斜めのナデを行っているが、ミガキの効果はでていない。内面は斜～横位のミガキが施さ

第14圖 1號住居址出土土器



第15圖 1号住居址出土石器 (1:2)



れている。外面とも赤彩はない。色調は薄橙～暗橙色を呈し焼成は良い。胎土にφ1～3mmの石英、砂粒が多量に含まれている。8は土師器の甕の胴部破片である。極めて薄手で器面調整は内面がケズリ、外面は上半がケズリ、下半がハケメとなっている。上下が逆転する可能性があろう。色調は橙褐～暗褐色を呈し、胎土には石英や砂粒が含まれるが焼成は良い。11は土師器の小形高杯の杯部破片で、口径12.4cmを測る。橙色を呈し、器面は外面がミガキ、内面がナデで調整される。焼成は良く、胎土に石英、長石粒を含んでいる。口縁1/6残存。9は土師器の甕（S字状口縁付甕）の口縁部破片で口径は推定で12.5cmを測る。2段に屈曲する特徴的な口縁部形態で、外面の頸部下に僅かにハケメがみえる。色調は暗橙色で焼成は良い。8の胴部と焼成や胎土がよく似ており、同一個体の可能性があろう。口縁1/4残存。10は土師器台付甕の胴脚接合部と考えられる。器面調整は、胴脚と蓋に内面はナデ・指オサエ、外面はナデによっている。色調は薄橙色を呈し、焼成は良く、胎土に石英・砂粒を含む。

本住居址の土器の時期は全体的には古墳時代前期前半から中頃に位置付けられるよう。その理由として、赤彩の高杯や小形高杯を残している点が古相であり、一方で甕がいずれも球形膨化し、頸部が「く」の字に屈曲することや、S字甕がC類にあたるとみられる点などが新相の要素となると考えられるからである。4世紀前半から中頃を比定したい。

石器として打製石斧（②）磨製石斧（③）砥石（④）凹石（⑩）滑石製管玉（⑫）チャートや黒曜石の剝片（⑤～⑪）が出土している。②は硬砂岩製で、基部から約半分を欠く。刃部も破損が著しく、石鋸としての使用が考えられる。③は薄緑色を呈する変成岩製で刃部の1/4ほどの残存で、刃部の使用痕が著しい。④は一応砥石としたが、粘板岩製で表面に3cmほどの擦痕が縦横にみられるのみである。⑪は安山岩製でよく楕円球形に整形されている。中央に径3cm、深さ5mmほどの凹みがある。一見していわゆる網文時代の凹石とは異なる。薄赤紫色を呈している。⑫は滑石製の管玉でやや縁がかった灰黒色を呈する。長さ1.7cm、直径5mm、ほど中央に直径2mmの穴が通っている。⑤～⑪はいずれも剝片で明確な加工は施されていない。⑤は赤チャート、⑥⑪はチャートのほかはいずれも黒曜石製である。

時期 出土した土器の年代から古墳時代前期の4世紀前半から中頃。

2 第2号住居址

検出 1号住居址調査後にさらに西に遺構の存在する可能性があるため12m×50mの範囲で西側に拡張した折、検出された住居址で北東5mに1号住居址がある。

規模・形状 1辺が5mの隅丸の正方形のプラン。主軸はE12°S。東壁中央から南壁沿いに周溝が巡る。

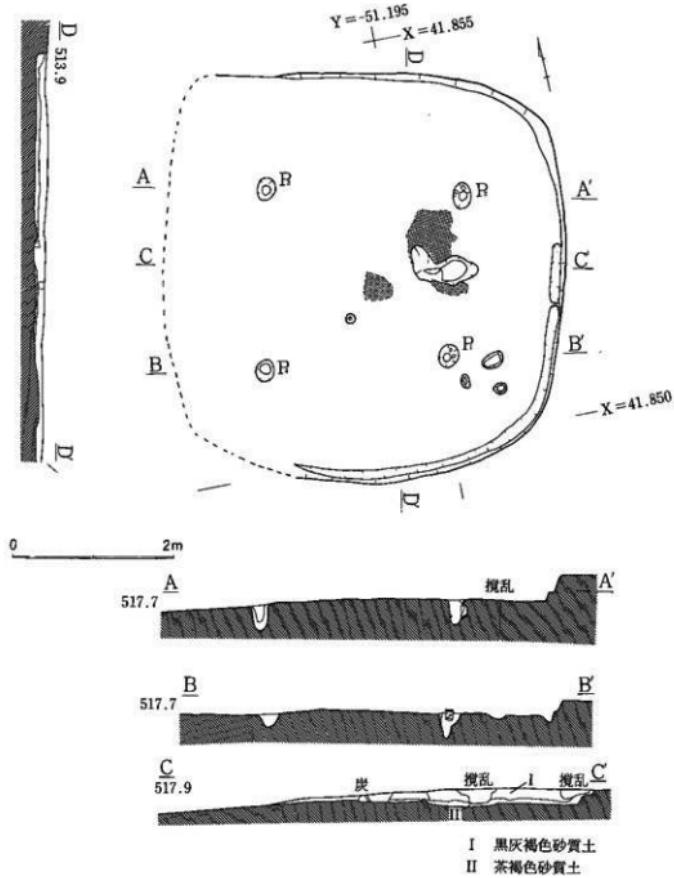
埋土 耕作による擾乱があるが大きくは2層に分類できる。第I層は若干の炭化物が混じった黒灰褐色の砂質土で、第II層は多量の炭化物や焼土がみられた。焼失住居であろう。

床面・壁 床はほぼ平坦で良好だが、表土が浅く擾乱のためかあまり堅くはない。壁は、西側が耕作のため失われている。壁は東壁で30cmほどで、急角度で立ち上がる。

炉 炉はP₁、P₂のほど中央と思われる。ここを中心にして焼土が厚く堆積しており、焼土には住居址の構造材や木器と思われる木片が多量に混じる。

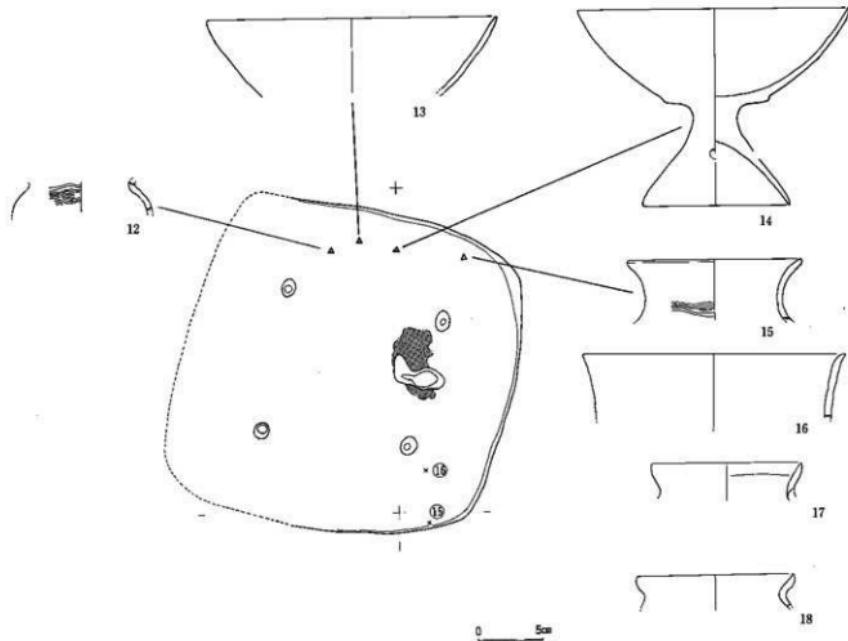
柱穴 主柱穴はP₁～P₄で、P₁には柱材と思われる炭化材が残っていた。

遺物の出土状況 住居址北壁の付近から土師器の高杯や甕が出土し、石器は南東壁の付近から小形の磨製石斧と打製石包丁が出土している。（第17図12～18 第18図⑬～⑯）

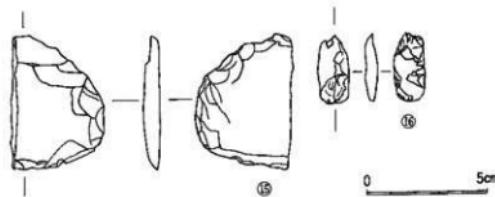


第16図 2号住居址

遺物 土器として土師器の壺(12、15、17、18) 高杯(13、14、16)などがある。12は土師器の壺の腹部上半の破片で、頸部の推定径が8.1cmを測る。外面には小刻みに断続する雑な櫛描波状文が全面に巡っている。内面の器面調整はナデによっている。頸部を明瞭に作っている点に壺形の特徴があろう。色調は暗褐色を呈し、焼成は良好、胎土に石英と雲母粒を含んでいる。13は土師器の高杯の杯部破片で、口径は22cmを測る。次の14と同様の杯部下半に稜を持った大形の高杯になると推定される。口縁部内面の削ぎ落しによる面などはみられない。器面はやゝ磨滅していく細かい調整はわからないが、縦方向のミガキが僅かに観察される。色調は灰褐色から暗褐色を呈し、焼成はやゝあまく、胎土は多くの黒色微粒、チャート、雲母、石英の微粒を含んでいる。口径1／6残存。14は土師器の高杯で口径20.6cm、底径11.2cm、器高15.1cmを測る。全形が捉えられるものである。杯部は外



第17図 2号住居址出土土器



第18図 2号住居址出土石器 (1:2)

面の下部に明瞭な稜を有し、そこから内湾気味に大きく外開する形態をとり、脚部はラッパ状に下方へ外開するが端部付近が僅かに内湾気味になる特徴的な器形を呈す。杯部上端は単純に丸くおさめられている。脚端部の内側には、ほんの少しではあるが肥厚を示す部分もあり、脚中位には $\phi 7\text{ mm}$ の4個の円孔が焼成前に穿かれている。器面の摩耗が進んでいて細かい調整はわからないが、杯部外面には斜～縦のミガキ、脚部外面には縦のミガキが僅かに認められる。色調は灰褐色から暗褐色を呈し、焼成はやゝあまく器表が剥落している部分が多い。胎土には石英、雲母、砂粒の $\phi 1\text{ mm}$ 未満の小粒を多く含んでいる。口縁 $1/2$ 、脚部 $1/2$ 残存。端部作り出しの技法は若干異なるが、外形からみていわゆる東海系の欠山・元屋敷式の高杯の範囲につながるものと推定される。15は土師器窯の口縁と頸部で、口径は 13.1 cm を測る。口縁は頸部から緩やかに外反しながら開くが、端部が内面を中心として僅かに内湾、上方へつまみ上げ状を呈する部分もある。頸部は2段の櫛描横線紋が観察されるが残存部だけでも2度の断絶をもつ。器面調整は器表の劣化が進んで不明な所が多いが、外面はナデ、内面は横のミガキとみられる。外面の一部に使用時のものと思われるタール状の付着物がある。薄橙から暗褐色の色調を呈し、焼成はよいが、胎土に石英と砂粒の小粒を含んでいる。12とともに在地の弥生時代後期の甕の系譜上にある土器と推定する。16は土師器の口縁部破片であるが、残存度が非常に小さいので図の精度は高くない。器種は不明だが、あるいはもう少し外傾度が増して高杯を見た方が適切かもしれない。器面は荒れが著しく、調整はまったくわからない。色調は橙色、胎土に長石微粒と赤褐色粒を含む。17は土師器の甕の口縁部と推定される小破片で、復元できる口径は 11.4 cm を測る。口縁端部が尖り、僅かに内湾している。薄橙色を呈し、焼成は良いが、胎土に $\phi 1\sim 2\text{ mm}$ の石英、雲母、砂粒が多量に含まれる。18は土師器の甕の口縁部と推定される破片で、口径は 11.8 cm に復元される。口縁部の長さが短く、端部を上方に説くつまみ上げている器形が特徴で、在地の弥生土器の系譜からは追えないものである。色調は、器表は桃橙色を呈するが胎土は灰色で、焼成はあまり。胎土に大粒の石英を含んでいる。

この住居址の土器の全体的な特徴は、甕在地の弥生土器系の櫛描波状文を残すものがある一方で、18のような外的な形態をとるものがあることと、13・14の東海西部系の高杯が伴うことがある。弥生土器系の甕は、本土器群が古墳時代初頭にあることを暗示させる。また、14の高杯は全形から受ける印象では、愛知県廻間遺跡の編年における廻間II式までの脚部の内湾に類似しており、3世紀末までに位置付けられるものである。これらを総合すると、2号住居址の土器群は古墳時代初頭、3世紀の後半から4世紀の初頭くらいの範囲の中に含まれるものであろう。松本市の弘法山古墳とほぼ同じ頃のものといえよう。

石器として打製石包丁⑮と小形磨製石斧⑯が出土している。⑮はやゝ珪化作用のみられる硬砂石製の打製石包丁で、 $2/3$ ほどは欠損している。⑯は蛇紋岩製の小形磨製石斧と思われるが、表面が扁平でないことなど不自然な形状であり、あるいはもっと大きな石斧の部分の可能性も考えられる。

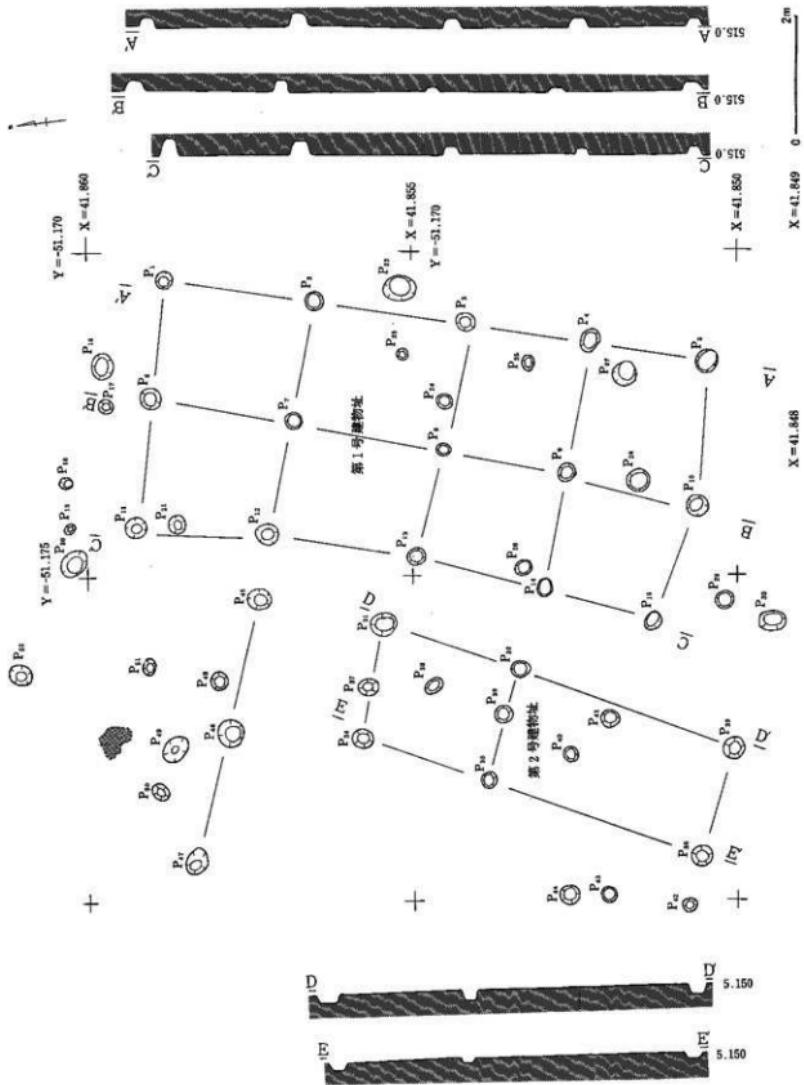
時期 出土土器から古墳時代初頭の3世紀後半から4世紀初頭。

2) 建物址

1号住居址の東に2棟の掘立建物址が検出されている。当初検出個所が小字「ミトフジ」であるため、中世の堂の可能性を追及したが、建物の大きさが堂とは異なり、また出土遺物もないことから、この2棟の建物址は1、2号住居址に伴う古墳時代前期のものであろうと考えた。

1 第1号建物址

検出 1号住居址の東側にあり間に2号建物址がある。1号建物址の東側の道路を隔てた水田は試掘では低湿地



第19图 第1·2号建物址

で遺構が検出されていないことから遺跡の東端に位置する遺構と思われる。

規模・形状 2間×4間の純柱の建物址で2.5m～1.8m間隔で柱が並ぶ。梁間3.8m、桁間8.5mで、主軸はN10°E。
遺物の出土状況 建物址からは遺物の出土はない。

時期 遺物等決め手となるものはないが1号住居址に近接し、他の時期の遺構が付近にはないことから1号住居址と同じ古墳時代前期と推定される。

2 第2号建物址

検出 1号住居址の東側にあり1号建物址との間にある。当初1号建物址と同一の建物址のような印象をもったが、柱が通らず別のものと判断した。

規模・形状 1間×2間の建物址で梁間約1.8mで、桁間は真中の柱から北側が約2m、南が3.5mと異なる。主軸はN20°E。

遺物の出土状況 建物址からは遺物の出土はない。

時期 遺物等決め手となるものはないが1号住居址に近接し、他の時期の遺構が付近にはないことから1号建物址と同じ古墳時代前期と推定される。

3) 遺構外の遺物

重機による試掘 でもトレントチから古墳時代の遺物が出土している。(第20図24、25)
24は土師器の甕の口縁部破片で、口径は14cmを測る。端部外面に面取りを有し、対応する内側を内湾させている。頸部付近に1段の輪描波状文が観察される。器面調整は磨滅でほとんどわからないが、端部はヨコナデ、外面がナデである。色調は器表は赤橙色、胎土は黒灰色で、焼成はあまり、胎土には大粒の石英を多量に含む。古墳時代初頭に位置付けられよう。

25は土師器の甕の口縁と胴上部で、口径は21.3cmを測る。口縁部が長く外反するが、胴部との間に明瞭に頸部のくびれを作り出している。頸部以下には2段の輪描波状文が巡っている。器面調整は磨滅が進んでよくわからない。焼成はかなりあまく、色調は薄橙色から灰褐色を呈し、胎土にφ1～2mmの石英粒が多量に含まれる。古墳時代初頭のものであろう。

(3) 平安時代の遺構と遺物

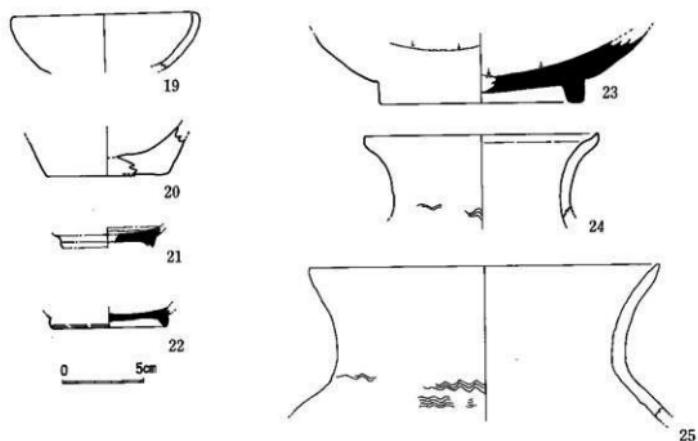
平安時代の遺構として北地区から住居址4軒、土壤2基が検出されている。表土が浅く全体が耕作による擾乱を受けており、住居址の全貌が明らかなのは3号住居址のみで、他の住居址については残存状態が極めて悪い。

1) 住居址

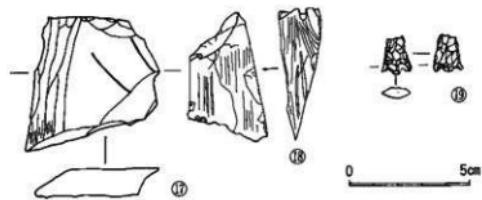
1 第3号住居址

検出 試掘トレントチを重機で掘削中に焼土が検出されており、1月の拡張時に住居址として確認された。北地区でも最も南にあり、北側に近接して6号住居址があり、南西に4、5号住居址があり、東南には基壇状造構がある。東南のコーナー付近を近世の井戸と思われる土壤に切られる。

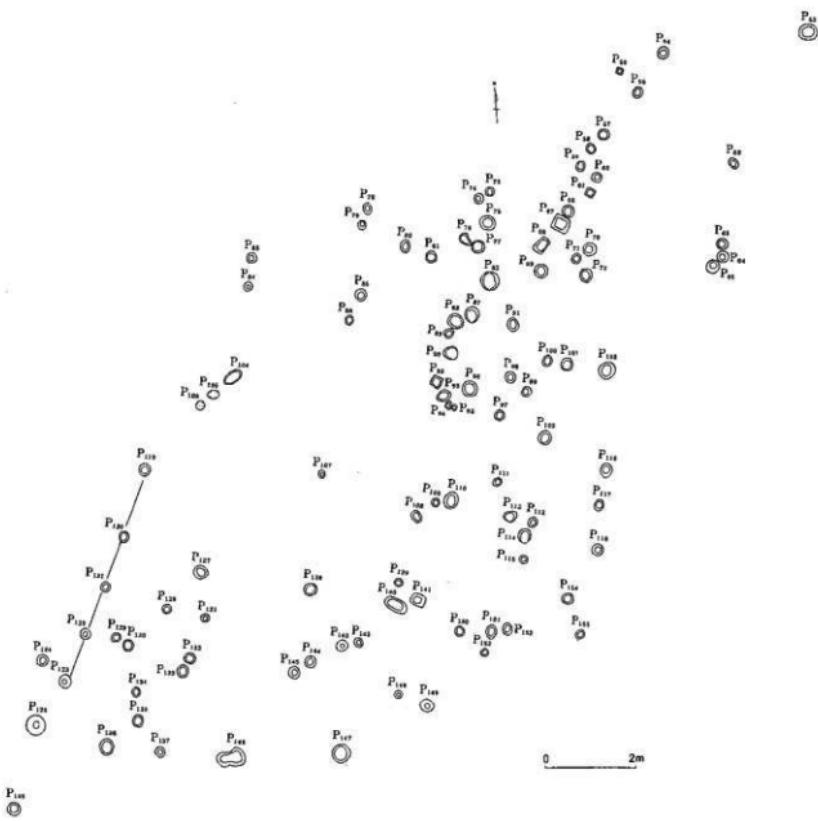
規模・形状 5m×4mの隅丸の長方形のプラン。主軸はE10°S。



第20図 その他の遺構及び遺構外出土土器



第21図 その他の遺構及び遺構外出土石器 (1:2)



第22図 北地区柱穴群

埋土 耕作による搅乱を受けておりはっきりしないが、若干の炭化物が混じった茶褐色である。

床面・壁 床は砂礫混じりの層の上に作られているため、小縞でデコボコしており、部分的に叩き固められた良好な床面がある。壁はほとんど残っておらず、西壁で10cmほどの残りが確認できただけである。

カマド 炭化物の混じった焼土が東壁中央部から検出されており、若干の粘土の袖の痕跡が残っている。

柱穴 主柱穴はP₁～P₄である。

遺物の出土状況 遺物の出土は住居址西半分に偏っている。主柱穴のP₁とP₄の間に焼土があり、その付近に遺物が特に集中しているほか、付近には熱を受けた砂岩製の台石や砥石が出土しており、この住居址は野巣治の住居址と考えられる。(第25図26～44 第24図⑩⑪)

遺物 土器として土師器の壺(26、42) 小形壺(32、43、44) 黒色土器杯(29、30、38、41) 須恵器壺(27) 杯(28) 軟質須恵器杯(31、33、37) がある。いずれも小片ばかりであり、図上復元したが28、32以外は精度は劣る。これらの土器は、地元産の軟質須恵器が多量にあることから、平安時代前期9世紀中頃から後半に位置付けられよう。石器として、台石、砥石(⑩⑪)がある。いずれも砂岩製で熱を受けた痕跡が見られ、石質のせいもあってかなり風化が進んでいる。

時期 出土した土器の年代から平安時代前期の9世紀中頃から後半。

2 第4、5号住居址

検出 1月の拡張時に検出された遺構で、当初、水田の耕土直下に住居址の僅かな落ち込みと焼土が検出されたためこれを4号住とし、土手を削して拡張を行った。最初に検出された床面より約10cmほど上で、地山の土がブロック状に混じった床面のようなやゝ堅い面があったため別の住居址として5号住とした。住居址の中央部が水田のかなり高い土手になっていたため開田時の搅乱が著しく遺構の把握が困難を極めた。それぞれの住居址のプランを確実につかめないまま、一応2軒の住居址とした。

規模・形状 1辺が6mの隅丸の正方形のプランを確認しているが、一つの住居址のプランではないと思われる。4号住はもっと小さく、1辺が4mくらいの可能性もある。5号住のプランは搅乱が著しく不明だが4～5mほどの方形のプランが推定される。

埋土 4号住は耕土直下のため分類できない。5号住は第II層の黄茶褐色土の上に第I層の黒褐色土が堆積しており、人為的な堆積ではない。

床面・壁 床は4号住は表土が浅く搅乱のためかなり荒れており、堅くない。5号住は平坦ではあるが、さほど堅く綺まつてはいない。壁は、4号住は残りが悪いが、比較的立上りは急であり、5号住は緩やかである。

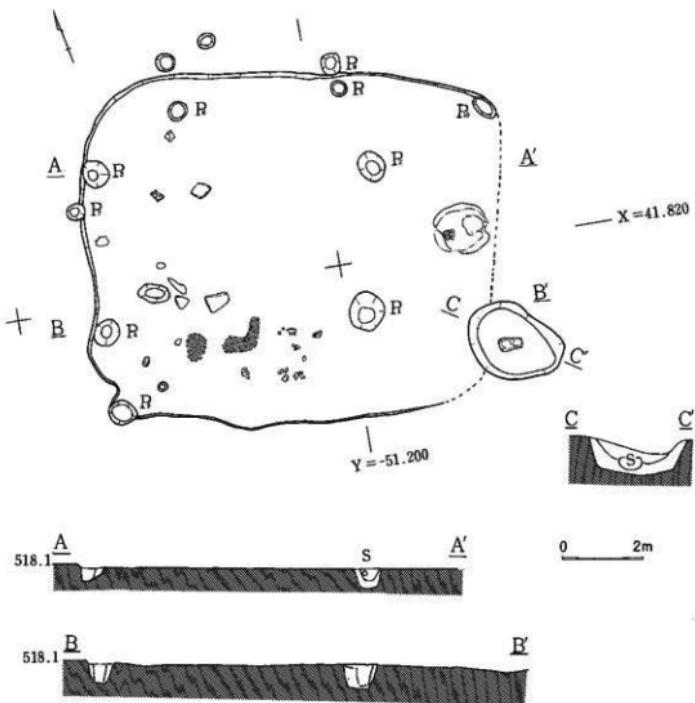
カマド 5号住はカマドは検出されていないが、4号住の焼土がカマドと思われるが、僅かな焼土だけであり、確実ではない。

柱穴 柱穴らしいピットがP₁～P₄まで検出されているが確実ではなく、主柱穴は不明。

遺物の出土状況 住居址の覆土から1片の須恵器の杯の破片が出土したほか、石器として砥石、磨製石斧、黒曜石剝片が出土しているが、どの住居址に伴うか確実ではない。(第27図45 第28図⑫～⑬)

遺物 土器として須恵器の杯(45)がある。45は青灰色を呈する須恵器の杯破片で、底部は回転糸切りで、9世紀中頃から後半のものと思われる。

石器として砥石⑫と定角式磨製石斧⑬、黒曜石剝片⑭が出土している。⑫はやゝ珪化作用のみられる砂石製の砥石で、両面ともによく使いこまれており、片面には幅1～3mmの搔き傷が見られ、側面には整形痕が、端部に



第23図 第3号住居址

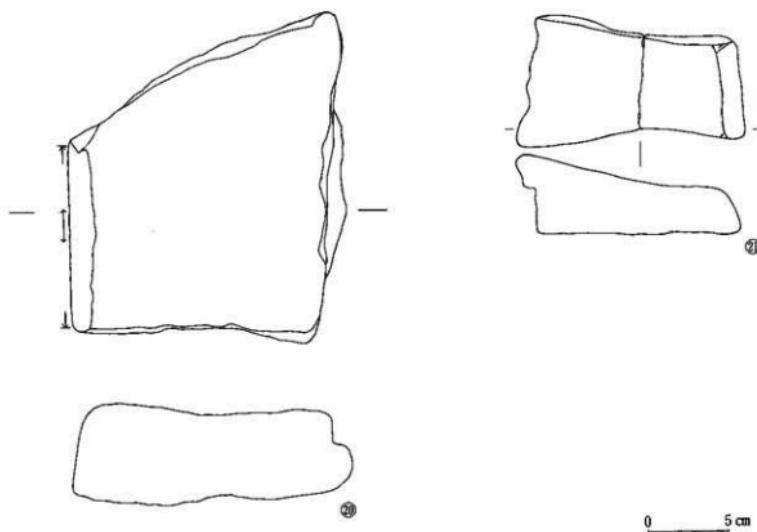
は一旦折れたものを再加工したときの加工痕が残る。⑩は蛇紋岩製の定角式磨製石斧の頭部破片で、左右の稜がはっきりしている。縄文時代の磨製石斧であろう。

時期 出土土器からすると平安時代前期の9世紀中頃から後半に位置づけられるが、土器がどの遺構のものかはっきりしない。4号住はもっと古い時期のものの可能性もある。

3 第6号住居址

検出 1月の拡張時に縄文時代中期の埋甕とともに焼土と僅かな住居址と思われる落ち込みが検出されたのでこれを6号住とした。当初縄文時代の住居址を想定したが、焼土からの土器で平安時代の住居址と判断した。南には3号住、西に4、5号住がある。

規模・形状 住居址の半分以上が失われており判然としないが、1辺が4mの隅丸の方形のプランと思われる。主軸はE18°S。



第24図 3号住居址出土石器

埋土 耕作による搅乱を受けておりはっきりしないが、若干の炭化物が混じった茶褐色である。

床面・壁 床は住居址の約 $1/3$ ほど硬化面が残っており、比較的平坦で良好である。壁はほとんど残っていない。

カマド 住居址北東のコーナーに僅かに掘くぼめたピットの中に焼けた平板な砂岩と焼土があり、袖の粘土も確認できたため、これをカマドとした。

柱穴 検出できなかった。

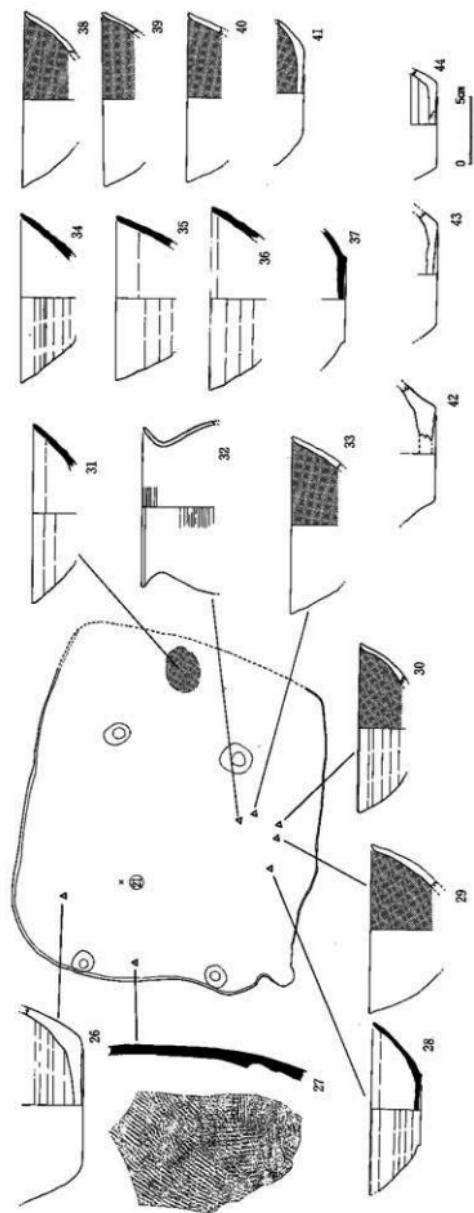
遺物の出土状況 遺物の出土はカマドのピットに集中している。(第31図46~50)

遺物 土器として土師器の杯(46~48) 黒色土器杯(50) 灰釉陶器碗(49)がある。いずれも小片ばかりであり、國上復元したが48以外は精度が劣る。土師器の杯は小形の皿に近いもので作りが粗い。平安時代末の11世紀後半から12世紀初頭に位置付けられよう。

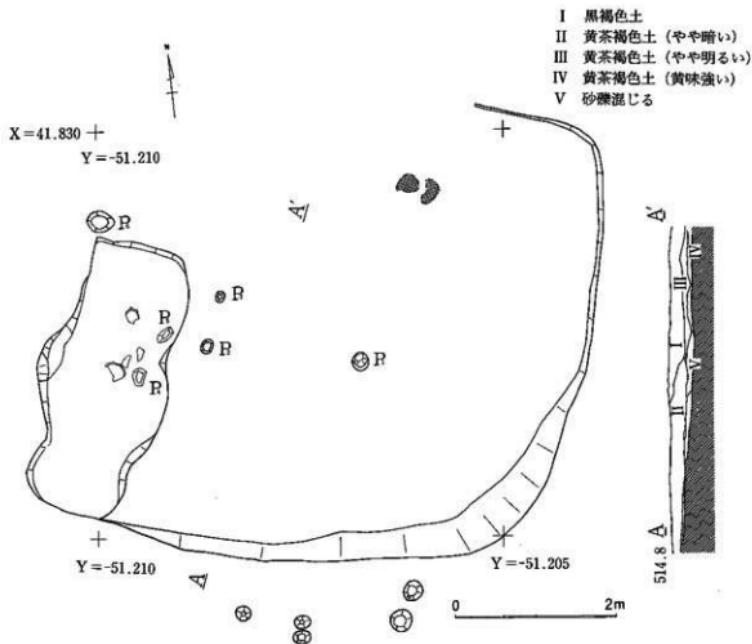
時期 出土した土器の年代から平安時代末の11世紀後半から12世紀初頭と推定される。

2) 土壙

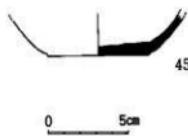
2号住居址と6号住居址の中間で、土壤が2基検出されている。1月の抜張時に表土を剥いだところ、1辺2.5mほどの住居址のような落ち込みがあり、精査したところ土壤2基であることが判明した。北側の土壤は1辺が



第25图 3号住居址出土土器

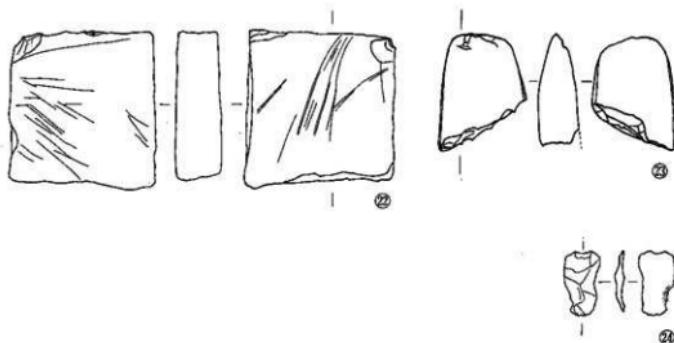


第26図 第4・5号住居址

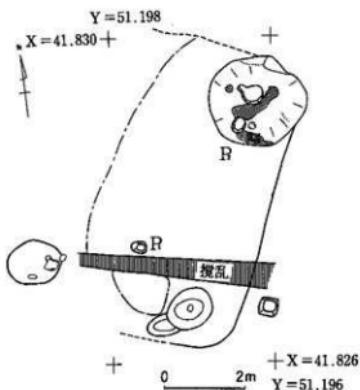


第27図 4・5号住居址出土土器

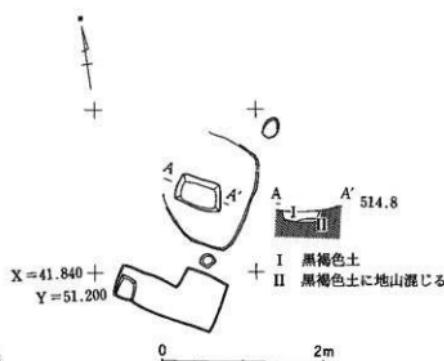
1.3mほどの方形の浅い堀込みの帆々中央に35×60cm、深さ15cmの長方形の2重の堀込みがあり、南側の土壌は、130×70cmの「L」字形の浅い堀込みの西側の隅に、25cm四方の方形の堀込みを設けている。2基の土壌の中間に直径15cmほどのピットがある。遺構の性格として、墓壙などの可能性を追及したがはっきりとはしなかった。出土遺物として土師器の壺(51)小型壺(52)があるがいずれも小破片であり、図の精度は高くない。平安時代前期9世紀中頃から後半の遺物である。3号住居址と同じ時期の遺構と推定される。(第32図51、52)



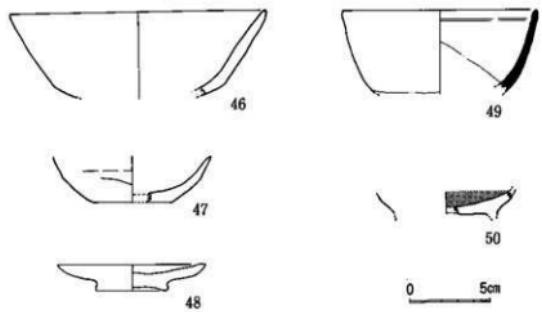
第28図 第4・5号住居址出土石器(1:2)



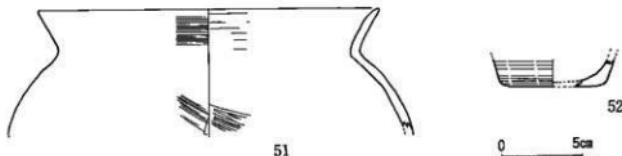
第29図 第6号住居址



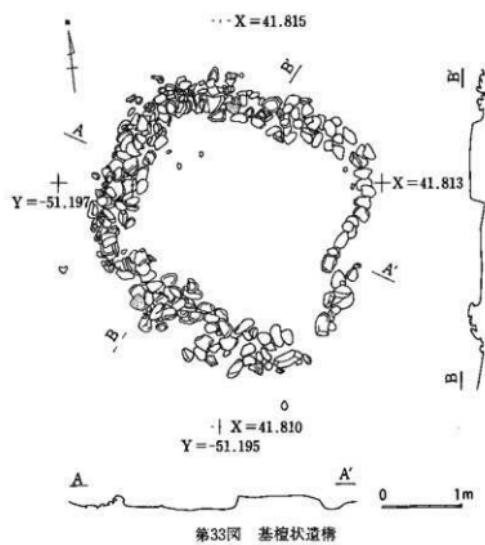
第30図 土壌



第31図 6号住居址出土土器 (1:3)



第32図 土壌出土土器 (1:3)



第33図 基壇状遺構

(4) 中世以後の遺構と遺物

中世以後の遺構として北地区から基壇状遺構が検出され、南地区から溝と、ピット群、土壙などが検出されている。北地区の基壇状遺構については、当初「ミトフジ」の堂の可能性も考えたが、遺構の残りがよいことなどから近世以降の小祠と考えた。

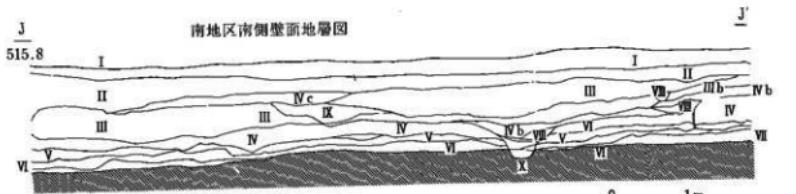
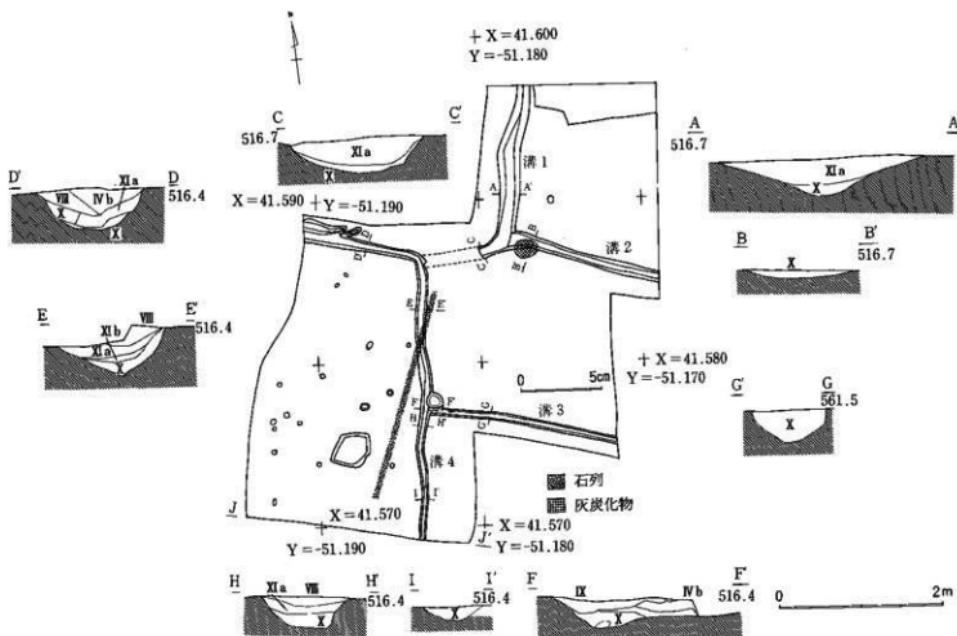
南地区的調査では調査区全体に水が滲み出し、しかも寒中であり調査はかなり困難であったが、試掘のトレンドチを拡張し試掘で検出した溝を追ったところ、溝を検出した地表下70cmの第IV層の明茶褐色土層のやゝ上面で、大きさ20~30cmほどの礫を長さ22mにわたって並べた家の土台のような石列が検出され、付近には炭化物を多量に含んだ燒土も見られたが、調査期間の関係で地点のみを押さえただけで本調査を行えなかった。検出面からすれば多分近世以降の遺構と思われる。重機による土砂排除は溝を検出すため地表下1.2mまで行い4本の溝を確認した。重機による土砂排除中に、第IV層からその下面にかけて内耳陶器の小片が若干出土したほか遺物は見られなかった。

1) 基壇状遺構

試掘時に2トレンドチで検出された遺構で、重機での掘削中に拳大の礫列があり、当初水田の暗渠排水ではないかと考えたが、礫列が50~60cmの幅で1辺が3mほどの正方形のプランになったため、遺構の残存状態がよいため比較的新しい時期の遺構と考え、付近の古跡に聞いたところ、このあたりに井戸があったとのことで、井戸跡として礫圓いを半分掘り下げたが、井戸の痕跡はなく、祠などの建物の基壇と考えた方が適当であると断定するに至った。

礫はほゞ1辺が3mの正方形のプランを示し、礫は20~30cmほどの比較的大きな石をベースに1列の方形に並べて、その上に握り拳大の石を20cmほどの厚さに積み上げている。礫の内側は粘土質の土が入れられていたが、叩き固められた様子はない。地区的古跡に祠の存在を確認したが伝承もないとのことで、あるいは近世以前に遡る古い時期の可能性もある。小字「ミトフジ」は1号住のある地点から北でありこの遺構のある地点とは離れている。「ミトフジ」に祀られた本尊は現在も公民館横の観音堂に祀られる「聖観音」であると思われるが、現在の堂は215cm四方の堂であり、この遺構の大きさに合っているが、江戸時代元禄11年の書き上げ帳には3間×2間の堂が在ったことが記されており、この遺構ではない。この付近に在ったという近世の住宅に伴う小祠の痕跡と現時点では考えたい。

出土遺物はいずれも小片ばかりではあるが、平安時代の土師器、須恵器、灰釉陶器の破片が出土しているが、遺構構築時の混入と思われる。(第20図19~22)



I	耕作地	Nb 明茶褐色土 (やや砂礫含む)	X 砂礫層 (一番粗い)
II	崩落土 (暗茶褐色土 (小種多))	V カなり暗い茶褐色粘質土	Xia やや砂質の粘土
III	黄褐色土 (若干疊合)	VI 茶褐色粘質土 (やや黄味かかる)	Xib (それぞの間に鉄分の間層あり)
IIIb	↓ ↓ (疊なし)	VII 黒色粘質土	
IIIc	↓ ↓ (きめ細い)	VIII 砂 磨	
IV	明茶褐色土	IX 砂礫にIII層混	

第34図 南地区全体図及び南地区地層断面図

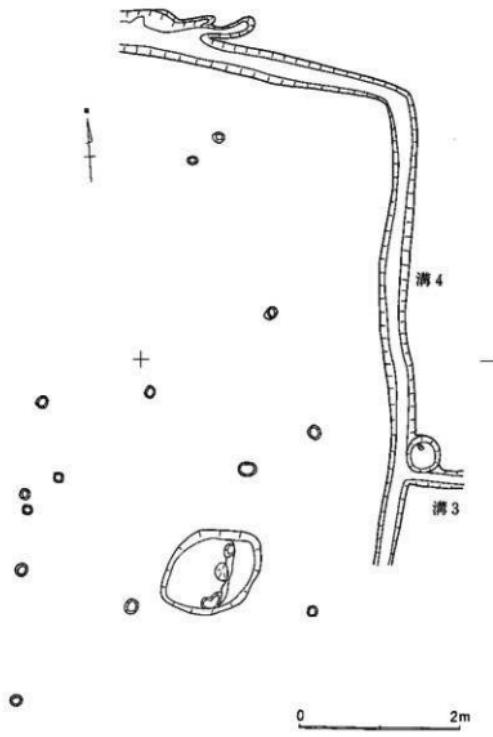
2)溝址

南区では4本の溝あとが検出されているが、いずれの溝からも遺物の出土はない。

溝1は他の3本の溝と異なり、非常に緩やかな角度に掘込まれた溝で幅も3m近くあり、堀と呼んでも差し支えない大きさである。溝1は溝2と合流して西へ直角に折れ、さらに溝4に流れ込んでいるが、溝4より30cmほど高い位置にあるため、検出作業中に重機により削られているため切り合いははっきりしない。あるいは、溝4の上を流れていた可能性もある。溝1はさらに北へ続き11トレンチでもその一部を検出した。

溝2は溝3とともに試掘で検出された溝で、溝1と合流しているが、合流地点の上部に灰や炭化物の混じった近世と思われる土壤があったため切り合いが不明瞭になっている。

溝3は堀込みの角度は比較的急で残りもよい。溝4と直角に合流している。合流地点には深いピットがあり、柱があったのか裏込めの石と思われる石が詰められていた。



第35図 南地区中世土壤柱穴群

溝4は堀方は急で、4本の溝の中で最も低い位置を流れる溝である。途中で溝3、1を合わせ、溝1との合流点で直角に西へ曲がる。調査区の南側壁の断面を観察すると、第IV層を堀込んで作られており、幅75cm、深さ35cmほどの溝である。

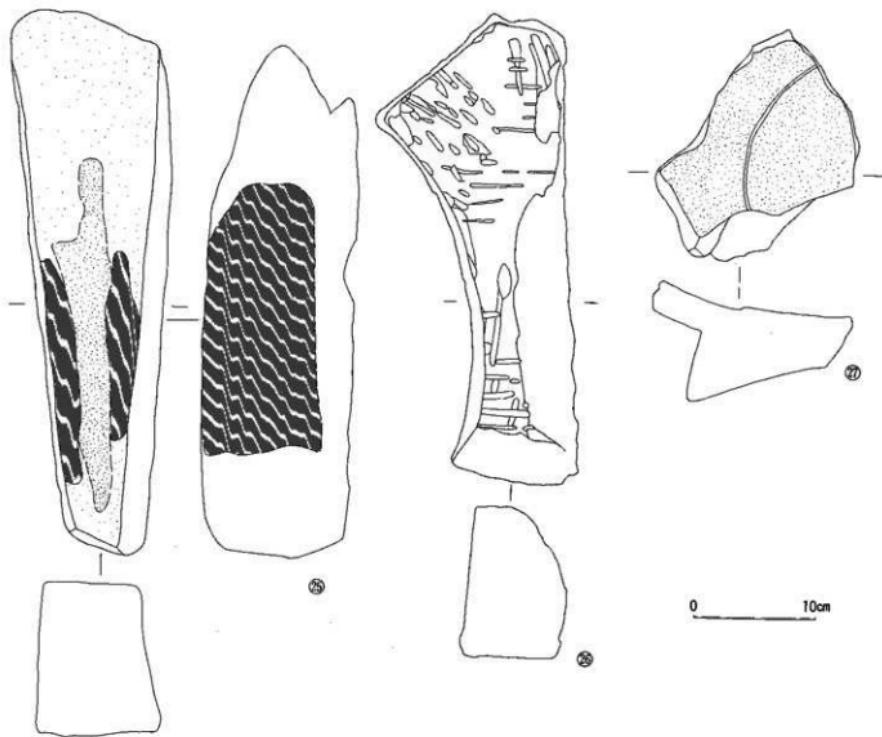
4本の溝址の検証から、溝4に他の溝が合流しており、溝4の内側に住居があったことが想定されるが、14のピットと浅い土壌が1基検出されているが、住居跡とは断定できなかった。しかし、遺構検出作業が難しく、中世の生活面と考えられる第IV層から約20cmほど削ってあるため検出できなかったと思われる。掘削中には若干の内耳土器の破片も出土しており、溝4の内側（西側）には多分住居があったと想定される。

3)遺物

この時期の遺物としては、南地区の溝址の検出時に内耳土器が出土しているが、いずれも小片ばかりで図示できるものではなく、時代の特定もできない。

第20図23は1号住居址の土壌2から出土した陶器の大形の鉢の底部破片である。内外両面に灰釉がかけられているが、外面の高台から3cmほど上から下は無釉となっており、内面の灰釉にはムラが見られる。胎土は良好で白色を呈する。江戸後期の19世紀代と思われる。

⑩、⑪は南地区の重機掘削中に出土したもので、⑩は砂岩製の据置きの砥石で幅13cm長さ45cmを測る。⑪は砂岩製の井戸などの枠と思われる。全面にノミによる調製痕が粗く残る。推定では直径約60cmほどの大きさの穴の枠になろう。⑫は溝3と4の合流点にあるピットから出土した石臼の破片で、軽石に近いような軽い安山岩製である。（第36図⑩～⑫）



第36图 南地区出土石器 (1:4)

第3節 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

長野県では、佐久盆地を中心に住居構築材などの樹種同定が数多く行われている。その結果、コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ節・クリ等が構築材に多く利用されていたことが明らかとなっている（パリノ・サーヴェイ株式会社、1992等）。また、時代による用材選択の違いも認められる可能性があるが、現時点では資料の蓄積段階にあると言えよう。

明科町では、北村遺跡で行われた樹種同定の結果から、縄文時代後期の住居構築材にクリ、燃料材の可能性がある炭化材にケヤキ・カエデ属・かや等が使用されていたことが明らかとなっている（鈴木・能城、1993）。しかし、他に調査例が知られていないため、用材選択の詳細な傾向については不明である。

今回調査が行われた上生野遺跡では縄文時代～近世に至る遺構・遺物が検出されている。本報告では、古墳時代および中世の遺構から出土した炭化材の樹種を明らかにし、当該期の用材選択について検討する。またこれらの炭化材から時代別に1点づつを選択し、年代確認のために放射性炭素(¹⁴C)年代測定を実施する。

1. 試料

試料は、古墳時代前期の住居（1号住・2号住・5号住）から検出された炭化材12点と、中世の建物址および西堀から検出された炭化材6点である。このうち、5号住覆土試料については、同一試料が2点あったため、ハイフォン（-）で枝番号（1、2）を付した。樹種同定は、これらの炭化材全点について行い、年代測定は2号住No.5と西堀No.2の2点について行う。なお、各試料の詳細については、分析結果と共に表1に記した。

2. 方法

（1）放射性炭素年代測定

測定は、学習院大学放射性炭素年代測定室が行った。

（2）樹種同定

試料の木口（横断面）・枉目（放射断面）・板目（接線断面）の割断面を作成し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡（無蒸着・反射電子検出型）を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

3. 結果

（1）放射性炭素年代測定

年代測定結果を表1に記す。

表1 上生野遺跡・放射性炭素年代測定結果

Code No	検出遺構・試料名	試料の質	遺構の推定年代	年代（1950年よりの年数）
Gak-18758	2号住 No.5	炭化材	古墳時代前期	1970±90 20 B.C.
Gak-18759	西堀 No.2	炭化材	中世	1310±90 A.D. 640

・放射性炭素の半減期は、LIBBYの半減期5570年を使用した。

(2) 樹種同定

樹種同定結果を表2に記す。炭化材の樹種は、1号住No.1、2号住炉北焼土、5号住覆土-2、中世建物址No.1、西堀No.1～3の7点が保存が良好ではないために樹種の同定に至らなかった。これらの炭化材については、木材組織が多少とも観察できた場合には木材組織の形態などを記し、組織が全く観察できなかった場合には不明とした。その他の試料では、5号住覆土-1から2種類の木材が確認された。同定された樹種は全て広葉樹で、4種類（カバノキ属・クリ・モモ・サクラ属）が認められた。各種類の解剖学的特徴などを以下に記す。

・カバノキ属 (*Betula sp.*) カバノキ科

散孔材で、管孔は放射方向に2～4個が複合する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は密に対列状～交互状に配列する。放射組織は同性、1～3細胞幅、1～30細胞高。

・クリ (*Castanea crenata Sieb. et Zucc.*) ブナ科クリ属

環孔材で孔間部は1～4列、孔周囲で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

・モモ (*Prunus salicina Lindley*) パラ科サクラ属

環孔性を帯びた散孔材で、年輪のはじめにやや大型の道管が1～2列配列し、やや急激に管径を減じた後、晚材部へ向かって管径を漸減させる。道管は单穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性III型、1～5細胞幅、1～50細胞高。

・サクラ属 (*Prunus sp.*) パラ科

散孔材で管壁厚は中庸、横断面では角張った梢円形、単独または2～8個が複合、晚材部へ向かって管径を漸減させる。道管は单穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性III型、1～6細胞幅、1～60細胞高。

以上の特徴から、サクラ属の中でも落葉性のサクラ亜属やウツミズサクラ亜属と考えられる。

表2 上生野遺跡・樹種同定結果

検出遺構	時代	試料名	用途	樹種名
1号住	古墳時代前期	No.1 焼土内炭化物		広葉樹
		No.1	住居構築材？	カバノキ属
		No.2	住居構築材？	カバノキ属
		No.3	住居構築材？	カバノキ属
		No.4	住居構築材？	カバノキ属
		No.5	住居構築材？	カバノキ属
		No.6	木製品	カバノキ属
		No.7	住居構築材？	サクラ属
2号住	古墳時代前期	No.8	住居構築材？	カバノキ属
		炉北焼土	住居構築材？	不明
5号住		覆土-1		カバノキ属
		覆土-2		クリ
				広葉樹（散孔材）
南地区 中世建物址	中世	No.1		不明
		No.2		カバノキ属
		No.3		モモ
西堀	中世	No.1		不明
		No.2		広葉樹
		No.3		広葉樹

4. 考察

(1) 年代値について

炭化材の年代値は、いずれも出土遺物などから推定されている年代より古い値であった。古墳時代や中世頃の放射性炭素年代測定値は、実際よりもやや古く出ることが年輪年代との比較から確認されている（東村、1990）。この背景には、宇宙線や古気温の影響が考えられており、今回の試料についても同様のことが指摘できる。また、古材の再利用により、実際の使用年代よりも古い値が出た可能性もある。いずれにしても、今回は各時代1点づつ測定を行った段階である。今後さらに資料を蓄積して、同様の傾向が得られるか確認していく必要がある。

(2) 古墳時代前期の用材選択

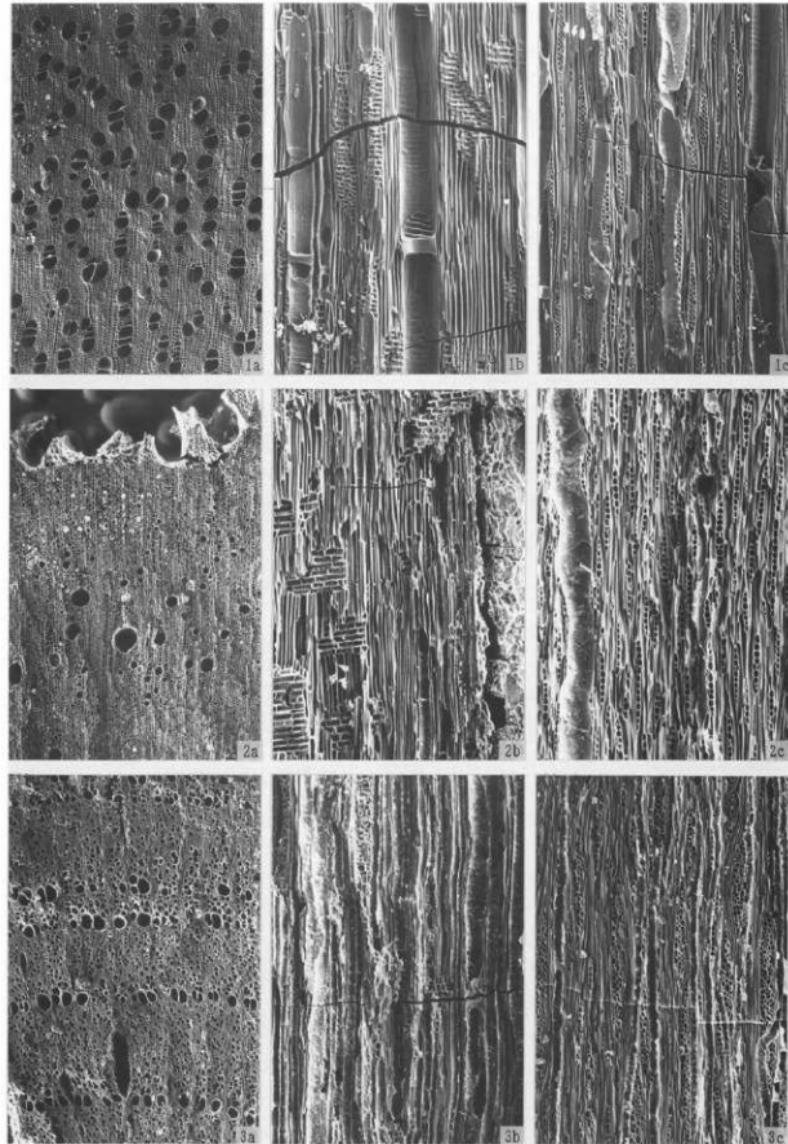
住居跡から得られた炭化材は、2号住居跡がカバノキ属とサクラ属、5号住居跡がカバノキ属とクリであった。このうち2号住居跡の炭化材は、No.6が木製品である以外は全て住居構築材と考えられる。この結果から、カバノキ属が住居構築材に多く利用されていたことが推定される。住居構築材にカバノキ属が用いられる例は、佐久市聖端遺跡等でも確認されている（パリノ・サーヴェイ株式会社、1992）。しかし、今回のように構築材の多くがカバノキ属で占められる例はこれまでに知られていない。住居構築材の用材選択は、類例が豊富な関東地方の調査例から、遺跡周辺の植生と住居の使用目的が大きく関わっていたことが指摘されている（高橋・植木、1994）。今回の結果から、古墳時代前期頃、遺跡周辺でカバノキ属が入手しやすい環境にあった可能性がある。しかし、炭化材の出土状況等が不明であるため、断定には至らない。また、焼失住居から検出される炭化材は、燃焼とその後の埋積過程を経て残存したものであるため、住居使用時の樹種構成を正確に反映しているとは限らない。これらの問題を解決するためには、今後さらに多くの遺跡で類例を蓄積する必要がある。

(3) 中世の炭化材について

中世の遺構から検出された炭化材は、いずれも出土状況および用途などが不明であるため、その用材選択については検討できない。今後用途などを明らかにしていくことが必要である。

ところで、今回の調査ではモモが1点出土している。モモは大陸から渡来した栽培種と考えられている。日本各地で核の出土は報告されており、広く栽培されていたことが推定される。今回の材が樹皮が付いた状態であることからも、中世の本遺跡でモモが庭木などに植えられていたことが考えられる。出土したモモは、成長を止める最後の2年間が他の年と比較して極端に年輪幅が狭い。このことから、今回の試料の場合気候が冷涼であった年に活動を停止している可能性がある。また、最後の年の年輪の成長状況（図1）は、夏材部の成長がほぼ終了していることが推定される。このことから、モモが活動を停止した季節は、ほぼ秋から冬の間と考えられる。

図版1 上生野遺跡・炭化材(1)



1. カバノキ属 (2号住 No.2)

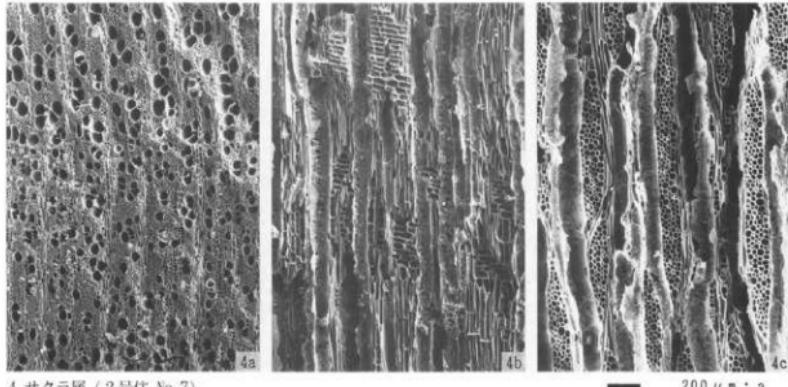
2. クリ (5号住フク土-1)

3. モモ (中世建物址 No.3)

a : 木口, b : 桿口, c : 板口

200 μm : a
200 μm : b, c

図版2 上生野遺跡・炭化材(2)



4. サクラ属 (2号住 No. 7)
a: 木口, b: 横目, c: 板目

200 μm : a
200 μm : b, c

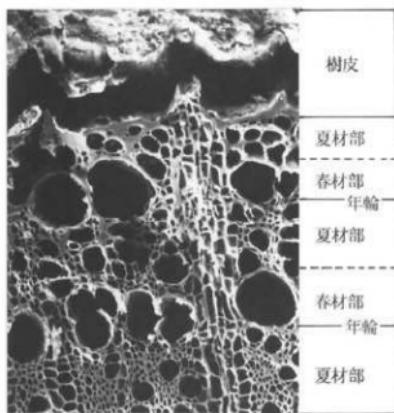


図1 モモ (中世建物址 No.3) の最外部年輪の形成状況

第4章 まとめ

上生野遺跡の調査は、冷夏による収穫の遅れと調査体制の関係で、調査の時期が冬期になってしまい、土質が粘土ということもありロスの多い大変な調査となった。工事の迫る中での調査で満足な調査とは言えなかつたが、大変に貴重な資料を得た。詳しくは各章で述べたが、要点をまとめてみたい。

第1は、縄文時代の遺跡の存在が明らかになった点である。既出遺物の中にも縄文時代のものではなく縄文時代の遺跡はまったく想定していなかったわけであるが、地元の製瓦業者から「昔、このあたりでの粘土採掘時に結構深いところから廻炉裏の跡や、土器が出た」と言う話を聞くと、縄文時代の住居址があったことは容易に推定できる。粘土採掘地は今回の調査で縄文時代の遺構の跡から200m近く南に離れた地点であり、縄文遺跡としての広がりはかなり広いことが想定されるが、背後の山地からの厚い堆積物に覆われており、明科町光の北村遺跡の堆積状況に近い状況と推定される。

第2は、古墳時代前期の住居址の検出である。明科町ではこの時期の遺構の検出は初めてである。第2章第2節で述べたように明科町で現在知られる古墳はすべて後期古墳であり、前期に遡る古墳は発見されていない。明科が交通の要所であることを考えると前期古墳の存在も想定されるが、平成3年度から5年度まで実施した詳細分布調査では該期の古墳は発見されていない。また古墳時代の集落址と考えられる遺跡も後期古墳の付近に同時期の遺跡が知られるのみであり、前期の遺跡や遺物は確認されていない。古墳時代後期の遺跡が濃密に分布する明科遺跡群や潮遺跡群は現在ほとんどが集落の下になっており調査が困難な状況にあるが、弥生後期の遺物が見られる明科遺跡群龍門淵遺跡の付近では該期の遺跡が検出できる可能性があろう。

今回2号住居址で検出された古墳時代初頭の土器は、松本平での該期の様相が分かる良好な資料となった。松本市中山の弘法山古墳と同時期に位置付けられるこの土器群は、弘法山古墳出土の土器が東海地方からの移入品であるのに対して、在地の弥生土器の系統を残すものと、東海系のものが混在し、この時期の住居址における土器のあり方の良好な資料となった。

今回の調査では、遺跡がほ×上生野段丘の全域に広がる可能性が確認できた。しかし、調査期間の関係で調査範囲が限られ、古墳時代の集落をもっと広範囲で確認できなかつたことは心残りであった。

最後に、冬期間の調査で体調を崩されてまで調査担当者を引き受けさせていただいた、山田瑞穂先生を始め御指導御助言をいただいた多くの皆さん、調査に多大なご協力をいただいた地元上生野地区の皆さんに心から感謝申し上げます。

報告書抄録

ふりがな	かみいくわいせき							
書名	上生野遺跡							
副書名	生野地区農村基盤総合整備事業に伴う緊急発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	明科町の埋蔵文化財							
シリーズ番号	第5集							
著者名	大澤 哲・関 全寿・直井 雅尚							
編集機関	明科町教育委員会							
所在地	〒399-71 長野県東筑摩郡明科町大字中川手6824-1 ☎(0263)62-3001(内)100							
発行年月日	1995年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ***	東経 ***	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かみいくわいせき 上生野遺跡	ながのけんひがしきくまぐん 長野県東筑摩郡 あいしならわらねくわき 明科町大字 ひがしきうちて 東川手	20241	517	36°22'34"	137°55'47"	1994.12.07 ～ 1995.01.28	約2,000m ²	ほ場整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
上生野遺跡	集落址	縄文中期 古墳前期 平安 中世 近世	竪穴住居址 掘立建物址 土壙 溝址	6軒 2軒 5基 4本	縄文中期土器 土師器・須恵器 灰陶陶器 打製石斧・磨製石斧 砥石・打製石包丁 凹石・管玉	古墳時代前期初頭の住居址が検出されたのは、周辺地域では初めてであり、出土した土器や石器の組成が弥生から古墳への移行期のものとして注目される。		

上生野遺跡
全景
(上空から)



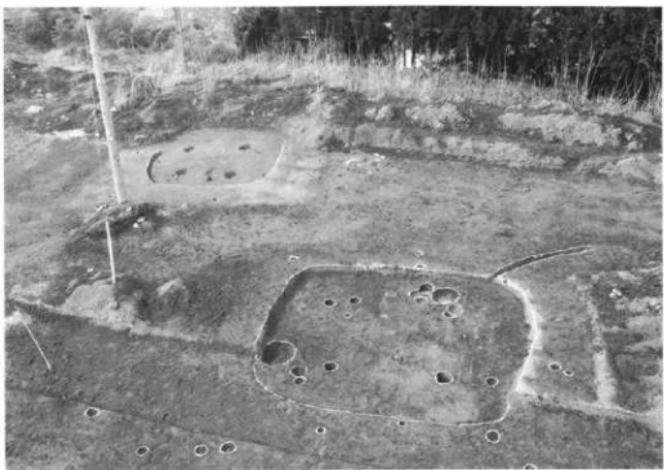
北地区
調査区全景



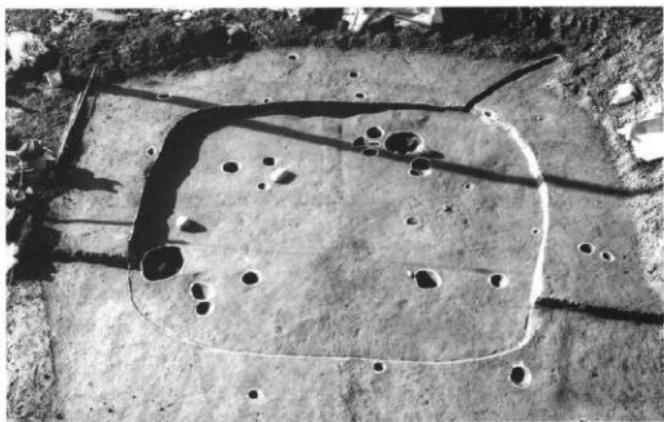
縄文時代
土壙



1·2号住居址
远景



1号住居址



1号住居址满
遗物出土状况



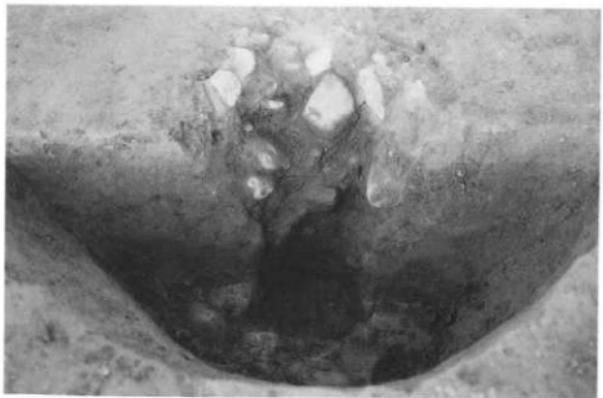
2号住居址
遺物出土状況

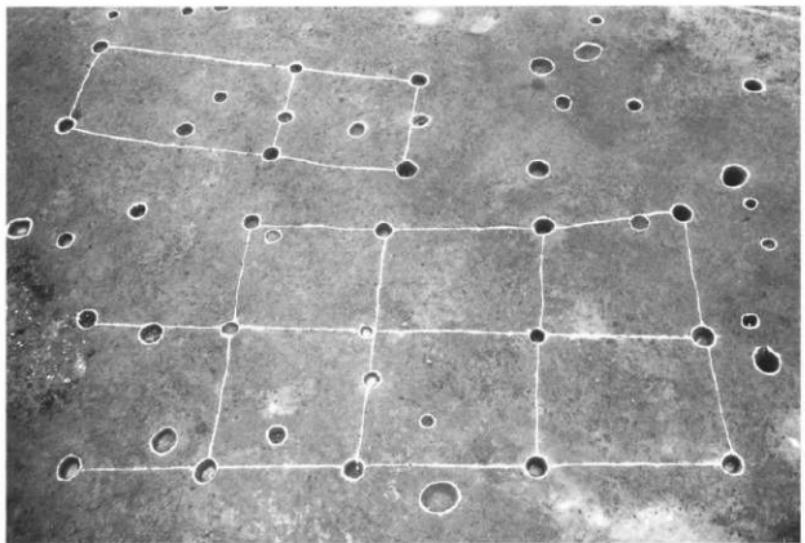


2号住
炭化材出土状況

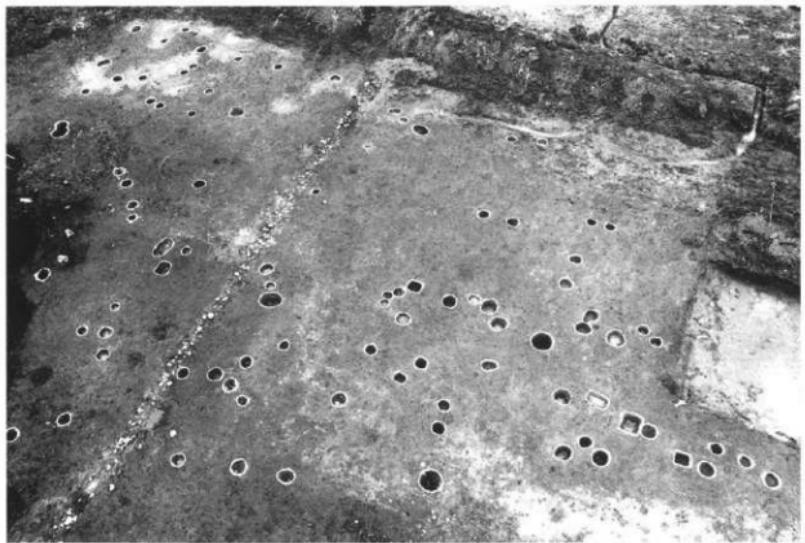


2号住
柱穴
裏込の石が残る



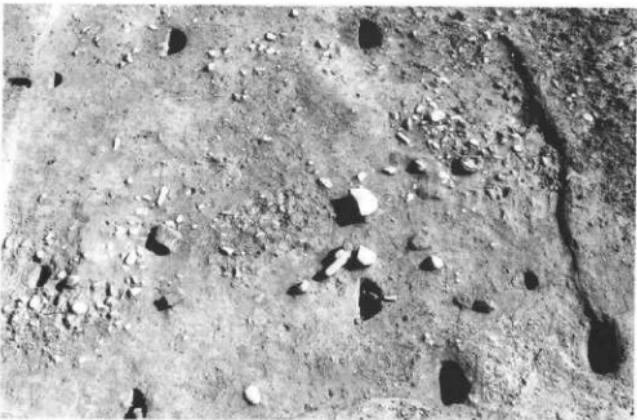


1·2号建物址(上2号、下1号)



北地区柱穴群

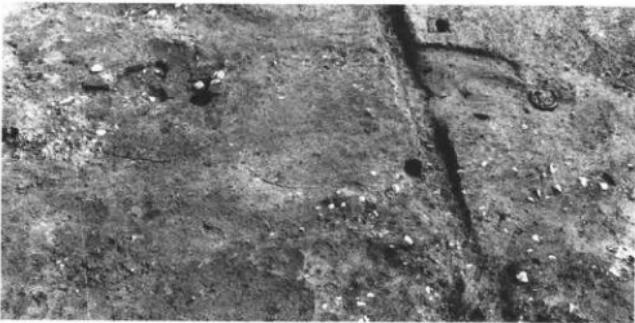
3号住居址



4·5号住居址



6号住居址



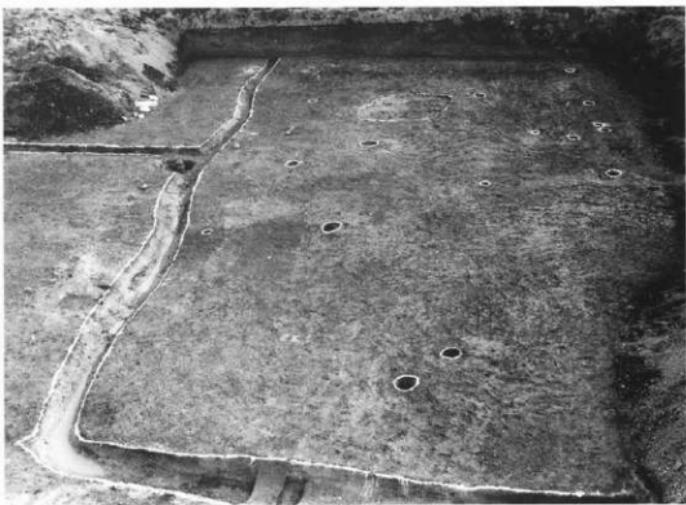
基壇状遺構（上部）

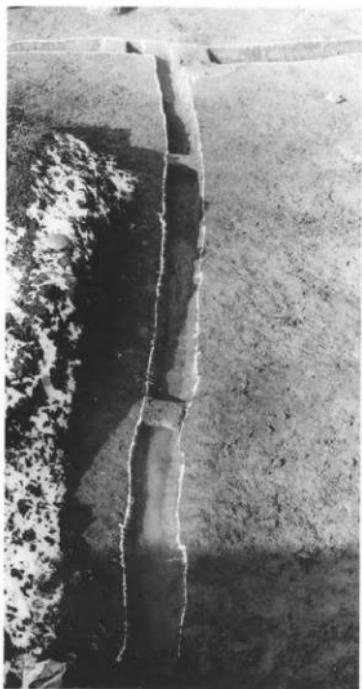


基壇状遺構（下部）



南地区溝址全景





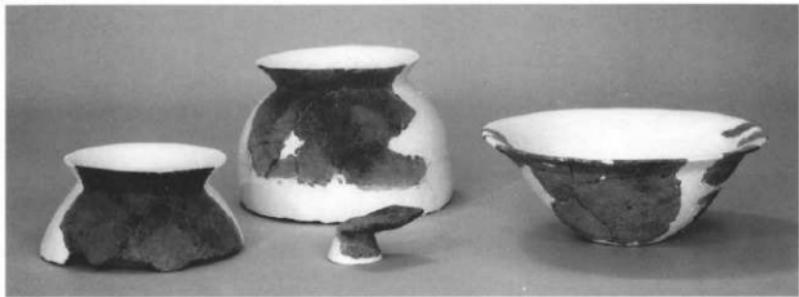
溝 3



溝 2

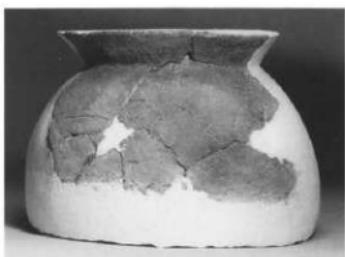


溝 3 溝 4 合流部 ピット



上 1号住居址出土土器
(左より 6、4、5、7)
右 1号住居址出土土器 7

下左 1号住居址出土土器 6
下右 1号住居址出土土器 4

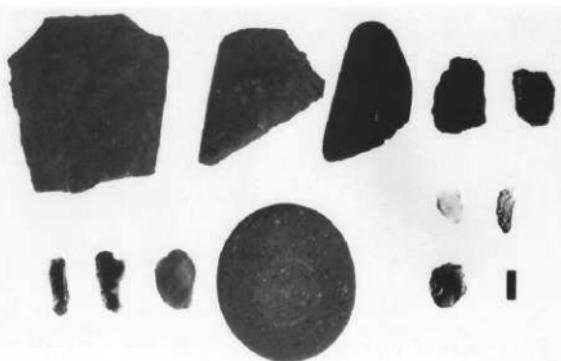


1号住居址出土土器

左上より
②、③、④、⑤、⑥

下左より
⑦、⑧、⑨、⑩

右中左より ⑪、⑫
右下左より ⑬、⑭



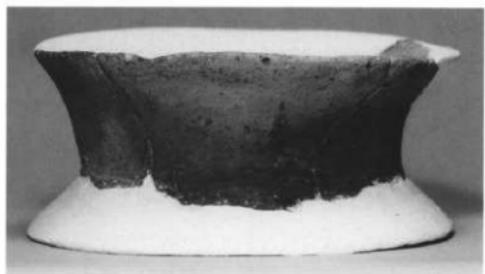


上 2号住居址出土土器
(左より 13、12、14、15)

右 2号住居址出土土器 14

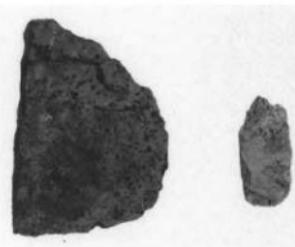


2号住居址出土土器 15

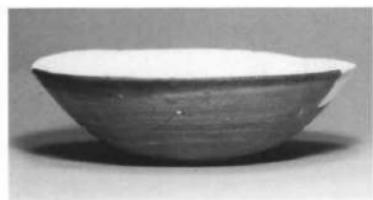




2号住居址出土土器 12



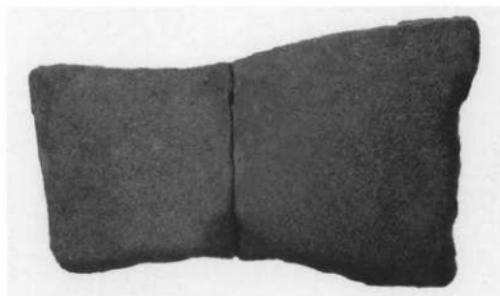
2号住居址出土石器（左より ⑯、⑰）



上 3号住居址出土土器
(左 28、右 32)



中 3号住居址出土石器 ⑩

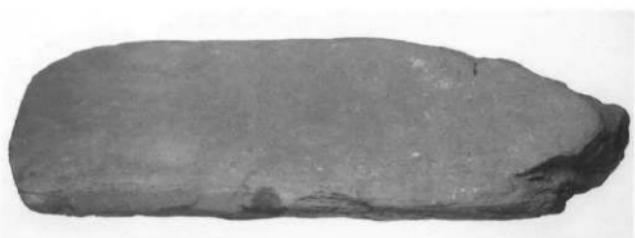


下
4・5号住居址出土石器
(左より ⑪、⑫、⑬)



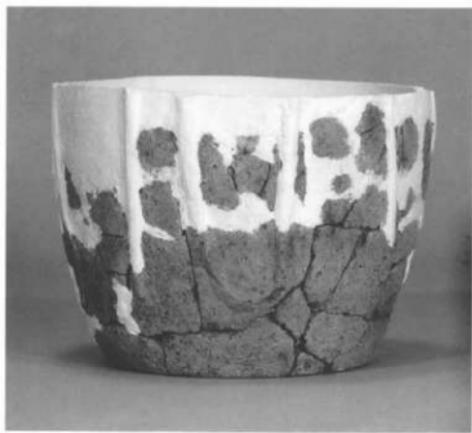
南地区出土石器

◎



南地区出土石器

◎



上 鳞文中期埋甕（第11图3）

右 埋甕付近出土石器（第12图①）



明科町の埋蔵文化財第5集
上生野遺跡

—生野地区農村基盤総合整備事業に
伴う緊急発掘調査報告書—

発行 明科町教育委員会
長野県東筑摩郡明科町
大字中川手6824-1

印刷 藤原印刷株
松本市新橋21
